

——冬馬。冬馬。

名前を呼ばれた。柔らかな身体に抱きしめられて、頭を撫でられる。その人が口にする名前は確かに自分のものなのに、一体どんな声で呼ばれているのかがわからない。

たぶん、優しくて落ち着いた声だったと思う。

——冬馬。

そう呼ばれるたびに身体から力が抜けていく。

この名前はそんなに特別な響きをしていたんだろうか？

「……かあさん？」

自分の口からこぼれた言葉に、ああこれは夢なんだなと、そう思つた。

夢だと自覚してしまえば、目の前に非現実的な光景が広がる。夕陽が差す神奈川の実家、リビングの中心。幼い自分が母の膝に抱きついて、頭を撫でられていた。もう声も忘れてしまった人だ。そう告げれば、薄情な子どもだと悲しまれてしまうだろうか。それどころか、恨まれてしまうかもしれない。

この家で母と過ごした記憶は色褪せている。大事だったはずの記憶は、母と一緒に写っている写真を見て、こんなことがあつたんだなと思いを馳せる程度のものになってしまった。

満面の笑みを浮かべるその人の隣で、同じように笑つている自分。一番近くに居たのに、いつの間にか居なくなつてしまつ

た人。居ないことが当たり前になつてしまつて、ずいぶんと経つ。

「ふふ、冬馬は甘えん坊ね。お母さんのこと、好き？」

母が嬉しそうに笑う。子どもの自分もつられて笑つた。

「うん！ おかあさんがいちばんすき！」

これ以上は見ていられない、幸せそうな親子から目を逸らした。強くこぶしを握つて、唇も噛みしめる。どんな悪夢だと、そんなことを思った。一番好きだなんて、どの口が言つてるんだ。死人に口なしと言うが、さすがにこれはあんまりな内容じやないか？ まだ枕元に立たれて「忘れるな」と直接訴えられるほうがマシだ。

「嬉しい。お母さんも冬馬が大好きよ」

やめてくれ。母の姿をした幻想が吐き出す言葉を、子どもの姿をした自分が応える言葉を、この光景を。現実にあつたやりとりなんじやないかと思つてしまふ。

もうここに居たくない。罪悪感で押しつぶされそうになりながら、一步だけ後ずさる。けれど次の瞬間、母の口から続いた言葉に目を見開いた。

「……一緒に居てあげられなくてごめんね」

けたたましく響くインターフォンの呼び出し音を耳にして、

天ヶ瀬冬馬は目を覚ました。

すぐさま枕元に置いていたスマートフォンをタップして時間を確認する。午前八時過ぎ。起床しようと思っていた時間の四十分も前だ。今日は仕事が昼前にはじまるからと、いつもより遅い時間に目覚ましを設定しておいたのだ。なのに、この音のせいで目が覚めてしまった。

カーテンの隙間から漏れる日差しの眩しさに目を凝らす。今日は、何か夢を見ていたような気もするが、それすらも吹っ飛んでしまった。

「うつぜえ……」

諦めるということを知らないのか、鳴り続けるインターフォンに毒を吐く。冬馬は寝返りを打つと掛け布団を思いきり蹴飛ばした。そのままゆっくりと起き上がり、あくびをひとつ噛み殺す。何を面白がっているのかだんだんとリズミカルになつていくその音に、嫌でも犯人がわかつてしまつた。

——翔太のやう。朝っぱらからなんの用だ。

玄関に向かう途中、念のためモニターを確認してみたがそこ

には誰もいない。いたずら好きなのは結構だが時間を考えろ、時間を。……いや、普段ならもう起きている時間だ。ということは、いつもの時間に起きていなかつた俺が悪いのか？ そん

なことを考えながら冬馬は玄関の鍵を開けた。

ガチャリ。気持ちの良い音と同時に、重たいはずの扉が勢い良く開かれる。

「冬馬君！ 今日からしばらく泊めてくれない!?」

やはり犯人は翔太だった。翔太は両手を大きく広げて冬馬に抱きつくと、開口一番にそう口にした。

「はあっ!? 翔太おまえっ……こんな時間に押しかけといて何勝手なこと言つてんだ！」

頷いてくれるまでは絶対に離さない、と言わんばかりに力強く抱きしめてくる翔太を、それでも無理やり引き剥がす。

見れば、翔太は大きなリュックを背負っていた。あれはロケで遠征するときに使っているものじやなかつたか？ 怪訝な目で見つめれば翔太は数歩後ずさり、気まずそうに冬馬から視線を逸らした。変装用にかけている眼鏡のレンズが鈍くひかる。

冬馬は横髪が少しばかり跳ねた自分の頭を搔き、「……翔太」と目の前の少年の名を呼んだ。何も玄関口で話しことはないのに、冬馬が何も言わなかつたら翔太も靴を脱ごうとしない。

「さっきの。泊めろつづーのはどういう意味だ？」

まあ、そのままの意味なんだろうが。理由がわからないことは、には頷けるものも頷けない。

翔太はぎゅっと唇を結んだあと、観念したように深く息を吐いた。

「……家出してきたの。だから、うちに帰るまで冬馬君ちに泊めてもらえないかなって……」

「家出？ なんでまた。おまえんち仲良いだろ」

冬馬は腕を組みながら翔太の家族を思い浮かべた。

さすがに父親との面識はないが、翔太の家族は自分と北斗にとても良くしてくれた。特に二番目の姉が北斗の熱烈なファンということもあり、彼女が在宅しているときのもてなしはこちらが一步引いてしまうほどのものだ。

いつのことだったか、夕食を駆走になつたこともある。そのときだって終始穏やかな空気が流れている。冬馬の目には、御手洗家の関係は良好に見えた。むしろ翔太は末っ子長男ということもあり、母親や姉たちから猫かわいがりされていたような気もする。

……そんな翔太が、家出。

何が原因でそうなったのか冬馬には想像もできなかつた。それが顔に出てしまつていたのかもしねい。考え込んでいた冬馬は翔太に胸元を掴まれて体勢を崩した。

「おい翔太っ」

とりあえず制してはみるが、翔太は聞く耳を持たない。ぐい

ぐいとスウェットを引っ張つて冬馬を自分の元へ引き寄せてしまつ。

「ツ、だから待て、って」

距離が近づいて、そのまま。唇を奪われた。

「——冬馬君のせいなんだよ？」

おねがい。泊めてくれるよね？

離れていた唇が楽しそうに弧を描く。その、有無を言わせない表情に冬馬はぞくりと悪寒を感じた。これ以上は踏み込まないと威圧するような笑み。けれど、甘くて優しい瞳——。

御手洗翔太という少年は意図してこういう顔をする。たまにしか見ることがない分、冬馬はその表情に必ずと言つて良いほど気圧されてしまうのだ。

「つーか、おまえのそれ。俺のせいなのかよ……」

どういうことだ。追及したくてたまらなかつたが、翔太はこれ以上自分の家出事情について話すつもりはないのだろう。疑問は尽きないが、冬馬もその気が失せてしまつた。

ほんの一瞬だけ触れられた唇を親指で拭つて「上がれ」と声をかける。踵を返してリビングに向かつていると「冬馬君」と、すぐ後ろにいた翔太から呼び止められた。

「これ。母さんが冬馬君について」

どこに持つていたのか、すつと差し出された紙袋を受け取

る。中を覗き込めば、そこには洗剤や調味料、缶詰とレトルト

パックの食品が詰め込まれていた。頭の上にハテナマークが浮かぶ。

「……おまえ、家出してきたんだよな?」

「冬馬君ちか北斗君ちにお世話になつてくるとは言つたかな」

果たしてそれは家出と呼べるのだろうか。

……まあ、行き先を告げて出てきているなら問題はないか。

今度、何か礼になるようなものを持って行かなければ。冬馬は少しだけ頬を緩めた。断つてもきりがないため、御手洗家から

の好意はありがたく受け取ることにしている。

「いつも悪いな。助かる」

「母さん世話焼きだからね。心配なんだよ。自分の子どもと歳変わんない冬馬君が一人暮らししてるのがさ」

「それを言うなら北斗もだろ」

翔太の姉は二十歳を超えていたはずだ。だから自分が特別じゃない。呆れて口にすると翔太は「ほんとうにね」と反対の手に持っていた紙袋を掲げて笑つた。

「これ、北斗君の分もあるんだよ。事務所に着いたら渡さなくちゃね」

きっと中身は似たようなものなのだろう。もしかしたら一番目の姉が北斗にだけは何か特別な品物を入れているのかもしね

ない。

大きなリュックを背中から降ろしてベッドに寝転んだ翔太に「寝るなよ」と冬馬は釘を刺した。「大丈夫」そのはつきりとした返事にひとまず安心する。仕事前の寝起きは悪くないが、誤差の範囲だ。朝っぱらから翔太を起こさしたくない。

やれやれと受け取った紙袋をキッチンの隅に置いて、冬馬は身支度を済ませるため洗面所に向かった。

跳ねた寝癖を整えて、翔太がほんとうに眠つていなかを確認すると、冬馬はエプロンをつけながらキッチンに立つた。冷蔵庫を開けて、そういういえば牛乳の賞味期限がもうすぐだったな

と思い出す。

「翔太ー、おまえ朝飯は食つてきたのか?」

「ううん。冬馬君のパンケーキ、あの卵とベーコンが乗つててやつが食べたいなあ」

「あー……あれか。おまえも飽きねえな。何枚食うんだ?」

「んーとね、三枚」

「わかった」

牛乳と卵、それからベーコンとプチトマトを取り出して冷蔵庫を閉める。すぐ隣の戸棚を開けて、数種類並んでいるパンケ

一キミックスのうち、甘くなく焼いても膨らまないタイプのものを選んだ。

——余談だが、冬馬は今パンケーキ作りにはまっている。はまっているというか、翔太に食べたいと言われて作りはじめ、抜け出せなくなっている。凝ったものでなければ少ない材料に加え、単純作業で作ることができるところが気に入っている。ある意味、重宝していると言つても良い。

そのとき翔太が要望したパンケーキは専門店に女子が何時間も並んで写真を撮るような、ふわふわとしていて厚みがあるものだった。冬馬はまず、ネットでレシピを調べてホットケーキミックスを使いスフレパンケーキを作った。見た目に閑しては及第点だったと思う。けれど、味はどうしてもホットケーキ寄りになってしまった。『……ちょっと違うかも』そんな翔太の言葉に頷いたことを覚えている。

「ねえ冬馬君。今度僕と一緒にパンケーキ食べに行こうよ」

次は小麦粉から作ってみるか、とスマートフォンを片手にレシピを漁っていた冬馬にそう提案したのは翔太だった。

「こういうのって、ほんのり食べてみたいとわからないと思うんだよね。味とか、食べたら口中でどうなっちゃうのかとかさ。……いい考えでしょ？」

両手で頬杖をついた翔太に微笑まれて、冬馬はため息をつく

ことしかできなかつた。

目の前に広がるパンケーキの山にごくりと息を呑んだのは、そんな会話をしてからほんの数日経った日のことだ。仕事が終わったあと、冬馬は翔太に手を引かれてその店の中に引きずり込まれた。

冬馬と翔太を見た店員が「あっ」と声を上げたが、それを人差し指で制したのは翔太のほうだった。素顔に眼鏡をかけただけの——冬場はこれに帽子もかぶるが——簡単な変装だ。人混みに紛れてしまえばそうでもないが、じつくりと観察されてしまえば知る人には見抜かれてしまう。

「このお店、姉さんが教えてくれたんだよ」

パステルカラーで彩られた女子向けの店内。居心地の悪さに頬を赤くした冬馬に翔太は耳打ちして、いたずらが成功した子どものように目尻を細めてみせた。

スイーツを提供する店というのはどうしてこうもかわいらしい装飾をしているのだろう。甘いものが好きなのに、店がこんなに大きまでは男は羞恥が邪魔をして入ることもできない。翔太のすごいところはこういう場所にも臆せず踏み込んで行くところだ。女性に囲まれて生活してきたからこそ、できることなのかもしれない。真剣な表情でメニューを睨みつける翔太を見

つめながら、冬馬は透明なグラスに口をつけた。

「うーん……。イチゴとチョコ、どっちもおいしそう」

「食いたいなら両方頼めばいいだろ。俺はなんでもいい」

「ほんと? じゃあ冬馬君はイチゴのやつでいい? 一口もらつてもいい?」

「おう」

「ありがとー冬馬君! 横の口も一囗あげる」

注文が終わってからも、冬馬は落ち着かない心地でいた。自分一人だったなら絶対に足を運ぶことはなかつたはずの店の中で、翔太と向かい合いパンケーキなんて代物を食べようとしている。あまりに現実感がなかつた。けれど、店員によつて運ばれてきた宝石箱のような皿に、これは現実なのだと嫌でも思い知らされた。

「こういうの、フォトジェニックって言うんだって」

まだ形の崩れていらない宝の山をスマートフォンで撮影しながら翔太が呟いた。「姉さんたちに自慢するんだー」なんて言つて上機嫌な翔太を前に、冬馬は言葉の意味がわからず首を傾げていたが、翔太は最後までその意味を教えてくれなかつた。

とろりとした生クリームに、小さくカットされたイチゴ。ちりばめられたブルーベリーとミントの葉。皿全体に回しかけられた赤いジャムに、真っ白な粉砂糖はまるで雪みたいだ。斜め

に重なつた三枚のパンケーキをフォークの背で押すと弾力なく沈んでいく。北斗の家にあるでかいクッシュョンみたいだな、と思いつながらナイフを差し込んで切り分ける。フォークの上、クリームと一緒に乗せた。

さて、これは一体どれほどの甘さなのだろうか。甘いものは嫌いじゃないが、甘すぎるものは苦手だ。冬馬は意を決して頬張つた。

「あ、甘くねえ……」

「ていうか、ちょっと甘いかも?」

「ああ。クリームのほうが甘いから、こっちの甘さを抑えてんだな」

「食感もふわふわって言うよりはもちもちしてるよね。うん、おいしい」

「食い応えもあるしな。これ食つたら晩飯入らねえわ」

「ええや!? 『ご飯は別腹って言わない?』

「言わねえよ。別腹なのはデザートだけにしとけ」

冬馬は苦笑しながら少し大きめに切つたパンケーキの上にイチゴとクリーム、ついでにブルーベリーも器用に乗せると、こぼれ落ちないようにフォークを横から刺して掬つた。

左手を添えながらそれを目の前に差し出すと、翔太は待つてましたとばかりに花咲くような笑顔を浮かべた。「あーん」

と。開かれた口の中にパンケーキを放り込めば翔太はぎゅっと

瞳を閉じて、ふるふると何かに耐えるように身体を震わせた。

「んーっ！ あつまーい！ おいしいっ！」

「そりやよかつた」

そのまま、手にしていたフォークで翔太の皿に乗っているパンケーキを切り取る。輪切りにされたバナナとまばらに振りかけられたナツツ。キャラメルでコーティングされているのかその色は濃い。そして、これでもかと言うほどかけられたチョコレートソースと生クリームのコントラストが目を引いた。こちらのパンケーキは四枚並んでいて、おまけにアイスクリームまで乗っている。

切り取ったパンケーキをフォークで刺して、次にチョコレートがかかったバナナをひとつだけ捕まる。おいしさに酔いしれていた翔太が「あー」と声を上げたとき、それらはすでに冬馬の口の中だった。

「……なんだよ。一口だけしか取ってねえだろ」

「残念。僕も冬馬君に『あーん』してあげたかったのに」

「なっ……で、できるかそんなもん！」

顔を赤くして声を荒らげる冬馬に翔太はでも、と続ける。

「北斗君は僕が『あーん』ってしたら喜んでくれるよ？」

「あいつと一緒にするんじゃねえ！ 僕はそういうの柄じやね

えんだよっ」

「僕にはしてくれるのに？ 変な冬馬君」

ぱくり。アイスクリームだけを掬って食べる翔太に冬馬はぐつと息を呑んだ。

確かに、冬馬は良く翔太にものを分け与える。食べてみたいなあという視線に根負けするときもあれば、最初の一一口目から翔太の口に運ぶこともある。そうするだけで「おいしい！」と言つて表情を緩める翔太を見る事ができるからだ。ものを食べている翔太は心から幸せそうで、見ていて飽きない。それが、自分が与えたものを頬張る姿なら尚更だ。こんなこと、気持ち悪ずかしくて伝える気にもならないが。

「まあ、いやだって言われても食べさせたいときは無理やり突っ込むだけなんだけどね」

「食べさせたいつーか作らせたいときだろ」「あれ、ばれてた？」

「『これおいしいから今度作つてよ！』って毎回言われたらさすがに気づくぜ」

「それでほんとに作ってくれるんだもん。お母さんだつてここまで甘くないよ」

「うっせ」

手と口を動かしながらとりとめのない会話を続ける。

実際、冬馬が翔太の手からものを食べたことは片手で数えるほどしかない。不意打ちで押しつけられたとき以外は、たとえ二人きりでの食事だろうが冬馬が口を開くことはない。そんなことで気分を害する相手ではないから、このまま良いと思っている。

きっと冬馬は与えられることに向かないのだ。与える側のほうが性に合っている。翔太はと、与えられる側の人間だ。出逢つてから今まで、ずっとそういう生き物だった。

「……どう？ 冬馬君、作れそう？」

四枚目のパンケーキにナイフを入れながら翔太が問う。冬馬は空になつた皿を眺めながら、ミルクだけを落としたホットコーヒーを啜つた。

「ここで食つてんのにまだ俺に作らせる気なのかよ」

「もちろん。なんのために来たのか忘れちゃつた？」

「忘れちゃねえが、おまえもわからんねえやつだな……」

そんなことを言つてはみたものの、会計時、レジの横に置いてあつたパンケーキミックスについて手が伸びてしまった。まあ良いか。そんな気持ちで手に取つて一緒に精算を済ませてしまつう。

作り方、焼き方、トッピング例。それらが乗つた一枚のレシピを受け取つて、冬馬と翔太は店をあとにした。店員からサイ

ンを求められたが、それは丁重に断つた。

帰り道、隣を歩く翔太が冬馬の顔を覗き込んで微笑む。

「やっぱり甘いね。冬馬君」

初めて逢つた日のような表情。わかりやすいようでわかりにくいのがこの男の特徴だ。裏表がある性格ではないが、表に出ているものがすべてとは思えない。

まるで水のようだと冬馬は思う。掴もうとしても指の間からすり抜けしていく。掴むことができないから、どういうかたちをしているのかわからない。

常に穏やかで、時に激的で、まさに型破り。

いつもこうして人の心を掴んできたのだろう。人心掌握には及ばないが、似たようなものだと思う。

「——だから好きなんだよ」

もう何十回と言われたその言葉を、冬馬は今回も聞き流した。一ヶ月ほど前の話だ。

フライパンをふたつ用意して、パンケーキとベーコンを分けて焼く。専門店で出てくるようなものを作ろうとするなら、ホットプレートを使って温度も確認しながら焼くのが良いのだが、今作つているものはいわゆるお食事パンケーキなのでフライ

パンで済ましてしまう。

パンケーキが一枚焼けたら皿に乗せて、その上にカリカリに焼いたベーコンを置く。それを二回繰り返したところで冬馬は卵をフライパンに落とした。端にチートマトも転がして一緒に焼いてしまう。水を差し、蓋をすればその中でパチパチと油が弾ける音がした。食欲をかきたてる音を聴きながら、冬馬はあくびをひとつだけこぼして、生地を作るときにカップに注いでいた牛乳を飲んだ。この工程にも慣れたものだ。

きつね色に焼けた三枚目のパンケーキを同じように重ねて、一回り大きな目玉焼きを覆いかぶせた。そこへ仕上げとばかりにブラックペッパーを一振りすれば、翔太お気に入りの冬馬特製ベーコンエッグパンケーキの出来上がりだ。

ナイフとフォークを手に、きれいに積み上げたそれが倒れてしまわないよう注意しながら洋室へと運ぶ。

ベッドに寝転んだままの翔太を呼べば、その身体はむくりと起き上がった。途中ではずしてしまったのか、眼鏡は枕元——冬馬のスマートフォンの上に置かれている。あれはもともと冬馬がかけていた眼鏡だったが、翔太がいたずら半分でかけて帰ってしまった日から翔太のものになっていた。

「うわあ、おいしそう……って、チートマト乗ってるし！」
「おら。文句言わずにさっさと食つちまえ」

「冬馬君の分は？」

「今焼いてる。飲みもん牛乳でいいか？」
「いいけど……あれ？ オレンジジュースってまだ入ってなかつたっけ」

覚えていたのか。投げられた言葉に冬馬は苦い顔をした。

「悪い。あれは凍らせて残りはゼリーにしちまつた」

「ゼリー？ それって僕が食べてもいいやつ？」

「おう。つつても初めて作ったやつだからな。上手くできるかわからねえぞ」

「いいよ。ぜんぜん食べちゃう。えへへ、いただきまーす」

定位位置に座つて両手を合わせた翔太は「ちょっと待つてろ」と、それだけを告げてキッキンに戻つた。放置していたパンケーキをひっくり返してから冷蔵庫を開けると、透明なボウルに入つたオレンジ色が見えた。それを牛乳と一緒に取り出す。

パックで買つたは良いものの、自分一人だと最後まで飲みきれる気がしなかつたオレンジジュース。製氷皿に乗つた分は氷に、乗らなかつた分はゼリーにしてしまつた。ワインに溶かせば簡易的なサングリアになると書いてあつたから、氷は北斗用。ぜんぶ凍らせてシャーベットにするのも悪くないと思つたが、製氷皿も冷凍庫の空きスペースも足りなかつた。ならば

と、ゼリーにしてみたのだ。

「おお……！ ちゃんと固まつてんな」

ボウルを両手で持つて左右に振ると、中のゼリーはふるふると揺れた。味はともかく見た目は完璧だ。

スプーンで一口だけ掬つて味見する。十分に冷えたそれは冬馬の口の中を潤してくれた。甘くはないが、柑橘系のさっぱりとした味があとを引く。おいしい。次に作るときはサイダーなんかを使って二層のゼリーにしても良いのかもしれない。

「上出来だぜっ」

ゼリーを小皿に取り分けて、翔太が使つてはいるカッピュに牛乳

を注ぐ。それを運べば、またも「おいしそう」と喜ばれた。

料理なんて、父と二人暮らしをする中で身につけた技術でしかない。その父も家を空けてしまい、冬馬が誰かに料理を振る舞う機会は格段に減つてしまつた。けれど、北斗も翔太も冬馬が作る料理をおいしいと笑つて食べてくれるから、止まらなくなつてしまつ。食べたいと言われたものもつい作つてしまつ。翔太には「甘い」と指摘されたが、そういうものではないと冬馬は思つてはいる。喜ばれると知つてはいるから作つてはいる。喜ばせたいと思つてはいるから作つてはいる。打算も良いところだ。

冬馬自身は食事にこだわりがない。食べられるものならなんでも良い。自分一人なら、食べなくたつて良い。自分が料理と

相性が良いことは否定しないが。

再びキッチンに戻り、コンロの火を止めてパンケーキを一枚とベーコン、目玉焼きを皿の上に乗せた。翔太の分と違い、チトマトは生のまま。それをひとつだけ摘むと冬馬は自分の口の中に放り込んだ。

……今日だつて、翔太が訪れなければ朝食を作ろうだなんて気にはならなかつただろう。冬馬は基本的に朝食をとらない。そういう生活が数年前から続いている。自分の分を用意したのは翔太が居るからだ。そうしないと「冬馬君は食べないの？」と不思議そうな視線を送られるからだ。

家族が多いためか、末っ子であるためか、翔太は一人での食事が好きではないらしい。食事は誰かとするもの、という考えが身についている。

それはとても良いことだと、冬馬は思つてはいた。

「うそっ、冬馬君それだけなの？ 少なくない？」

テーブルの上に置いた皿の中身を見て翔太が驚きの声を上げた。翔太の皿のほうは、冬馬が来るのを待つてはいたのかあまり量が減つていない。

「……普通だろ。おまえが朝っぱらから食いすぎなんだよ」

「遠慮して三枚にしたんだけどね。ほんとうなら五枚は食べれ

たんだから」

「牛乳使い切ったからおかわりはねえぞ。ゼリーで我慢しとけ」

「はーい」

目玉焼きにナイフを入れると、黄身が割れてとろりとした中身がベーコンとパンケーキの上に広がる。我ながら良い焼き加減だ。冬馬は満足気に微笑んで、パンケーキを食べはじめた。

「……つーかおまえ。泊まるっていつまで泊まつていくつもりなんだ？」

「えーと……一週間くらい？」

「長え！ 帰れ！」

「わかつてないなあ冬馬君。これは家出なんだよ？ 僕は今日、冬馬君ちにお泊りしに来たわけじゃないんだよ？」

「知ってるか翔太。家出つーのはな、家族に行き先を伝えて出てくるもんじゃねえんだよ」

——家出。その行為には冬馬も覚えがある。

あれは小学六年生の頃だったか。父と喧嘩をして「家出してやる！」なんて宣言をして荷物をまとめたことがあった。結論を言えばその家出は失敗に終わったのだが、あのときの自分は本気で実行するつもりでいた。財布の中身をすべて切符に変えて、行けるところまで行こうと思つていた。

喧嘩の内容なんて覚えていない。覚えていることと言えば、リュックに荷物をまとめたことと、遠くに行こうと考えていたことだけだ。それからも父とは何回か喧嘩をしたが、家出をしようとしたことは後にも先にもこの一回だけだった。

翔太は——本人はこれを『家出』なんて呼んでいるが、要するに気まずくて家に帰りたくないだけなのだろう。その原因はどうやら自分にあるようだし、責任を感じていないわけではない。けれど、理由もわからないのにそこまでの期間この家に泊めてやるつもりもない。

そういうえば、冬馬は食事の手を止めてベッドに向かった。正確には自身のスマートフォンの元に向かった。眼鏡の下敷きになつてているそれを手に持つてロックを解除する。

「……冬馬君？ どうしたの？」

訝る翔太の言葉を無視して、慣れた手つきで画面を操作する。開いたのはスケジュール管理アプリだった。冬馬はここに自分の分と、北斗と翔太のスケジュールを入力している。

「——翔太。おまえやつぱり明日帰れ」

「なんでも？」

「明日、夜にレッスン室借りてんだよ。帰つてくんの遅えし、飯の準備もできねえから」

「……そつか。舞台の本番、来月だもんね。じゃあ明日は北斗

君ちに行こつかなあ

「いや帰れよ」

「どうしても帰りたくないらしい。「あとで頼んでみよつと」なんてことを楽観的に呟く翔太に冬馬はため息をついた。これはもう、明日は北斗に預けて、家出の理由を聞き出すよう伝えておくほうが利口なのかもしない。

手のひらの中の画面に視線を落とす。明日の夕方、北斗と翔太の予定はラジオの収録だ。北斗の持ち番組——伊集院北斗のエンジェル☆キス。翔太はこのラジオに隔週で参加している。

冬馬はめったに参加しないが、冬馬が居ない回のほうが冬馬の話題で盛り上がるという、天ヶ瀬冬馬ファン必聴のラジオだ。これは北斗と翔太が冬馬のことを面白おかしく語るせいなのだが、それでファンが喜んでいるのならと、二人を咎めたことはない。人に聞かせても問題ないような、当たり障りのないことしか話していないことがある。

今回の家出騒動など、何年先に語られることになるのだろうか。何年先と言わず、次に参加するときにはうつかりこぼしてしまいたい。もちろん、円満解決すればの話だが。

「ほらほら冬馬君。突っ立ってないで早く食べちゃおう」

手招きをされて重い足取りで席に戻った。何食わぬ顔をして「おいしいよ?」と冬馬を覗き込んでくる翔太に、自分は要ら

ぬ気苦労をしているのではないかとすら考へてしまふ。

半月になつたパンケーキをさらに小さくして口に運びながら、冬馬は正面に座る翔太を盗み見た。黙々と食べる姿に見入ってしまう。

翔太は人よりも多く食べるが、意外にもその食べ方は落ち着いていて静かだ。一言で言うのなら品がある。食べ散らかすところなんて一度も見たことがない。今だつて、積み重なったパンケーキをきれいに切り分けて食べている。そのペースは早く、残りは少なかつた。

違和感があるとすれば、冬馬と鏡合わせのようにして持つナイフとフォークくらいのものだろう。箸を持っていたって、スプーンを持っていたって、これだけは慣れることができない。翔太と一緒に食事をとるとき、そういうえばこいつ左利きだったな、と冬馬は毎回のようと思つてしまふのだ。

「……ん、ゼリーもおいしい。また作つてよ。今度はマンゴーゼリーとかさ」

「マンゴーならプリンにしたほうがうまいんじゃねえの?」「それつてどつちも作つてくれるってこと?」

きらきらと期待に満ちた眼差しに「作らねえよ」と返事をして、テーブルの上に肘を置いて頬杖をついた。……けれども、まあ、自分のことは自分が一番わかっている。悪態をついてみ

せたところできっと作ってしまうのだろう。仕方ねえから作ってやつたぞ、というような顔をして。そしてそれは翔太も理解していることなのだ。その証拠に、素直じゃないなあ、とそんなことを言いたげな笑みを向けられる。

「——つたく。笑ってんなよ」

「えー？ なんのことだかわかんない」

翔太は最後の一匙を丁寧に掬うと、名残惜し気もなく口の中に隠してしまった。

「へえ。そんなことがあつたんだ」

笑みを含んだ北斗の言葉に対して、冬馬は嫌な顔を隠しもせずに「面白がってんじやねえよ」と返した。ほんとうは足のつま先で脛の辺りを小突いてやりたかったが、今は借り物の衣装に身を包んでいるため、ぐっと気持ちを抑える。

今朝、翔太が荷物をまとめて家まで来たこと。どうやらその原因が自分にあるらしいということ。朝食にパンケーキを焼いたこと。夕食がハンバーグに決まったこと。明日、弁当を作つてほしいと言われたこと——。冬馬はそんなことをつらつらと語つただけなのだ。同情されるならまだしも、微笑まれるのは何かが違うと思う。

「翔太の家出の原因、マジで心当たりないの？ 冬馬」「おう。翔太んちなんてもう滅多に行かねえしな」「まあ、そこは俺も気になるところだし、聞き出せるようがんばってはみるけど……翔太だからなあ」

顎に手を当てて困ったような表情を浮かべた北斗は訝つた。相手が北斗だからこそ翔太も口を開くのではと思つていたのだが、そういうわけではないのだろうか。

北斗と翔太は仲が良い。兄弟というものを知らない冬馬が二人を見てほんとうの兄弟みたいだと思うほどだ。翔太は北斗に対してあからさまに甘えてみせるし、北斗も北斗で、翔太にはよくものを買い与えている印象がある。長男と末っ子同士、相性が良いのかもしれない。

さつきだって、翔太は北斗へ生活用品が入った紙袋を手渡しながら「明日、北斗君ちに泊まつてもいい？」と了承を得ていた。翔太の頼みに北斗は自分の予定を確認することもなく、理由を尋ねることもなく、即座に「いいよ」とふたつ返事をしてみせたのだ。二言目には『エンジエルちゃん』『女の子との予定がいっぱい』などと言う男が、だ。

相手が冬馬だったとしても同じ言葉を返してくれたのだろうが、それを抜きにしたつて北斗はつくづく身内に甘い。自分たちに甘いとわかっているから、翔太は北斗の予定を変更させな

いよう必ず前日までに確認を取る。今朝、北斗の家ではなく冬馬の家に来たのもこれが理由だろう。そうでなくとも翔太から「こないだ北斗君ちに突撃したら上半身裸で出てきたことがあるってさー」とこぼされたことがある。自衛も兼ねているのだ。「いいよー、御手洗くん。次はワンちゃんと一緒に上目遣いもらつてもいいかな?」

少し離れた場所でシャッターを切る音がする。翔太はタレン

ト犬のポメラニアンを抱き、カメラマンに要求された笑みを浮かべていた。その光景を北斗と並んで見つめながら冬馬はガシガシと後頭部を搔く。ワックスのせいか髪が少しだけ固まっていた。

今日の仕事はこの撮影とインタビューだけだった。女性向けのファッション雑誌。編集がジユピターのファンを公言していて、毎月結構なページ数の特集を組んでくれる。一年契約の予定だが、ジユピターを起用したことによる雑誌の売上は上々らしく、もしかしたら契期が伸びるかもしれないとプロデューサーが喜んでいた。

来月の特集テーマは『恋人と休日の散歩』だ。この手の雑誌にはめずらしく実際に住宅街に出ての撮影。リードに繋がれたポメラニアンは吠えることもなく大人しい。北斗の撮影が一番終わって、今は翔太の番だった。冬馬は最後らしい。

雑誌の読者は二十代の女性が中心なので、当然その年代に向けたアプローチをとることになる。甘い表情を惜しげもなくカメラに向ける北斗に、年下男子であることを全面に押し出した翔太。冬馬も十代だが、どちらかと言えば北斗のような画を求めるだろう。

「じゃあ次、片足上げて回ってみて。リードは両手に持つてね。絡まないよう」

「はーい」

この仕事に関して言えば、ポーズは疎か表情すら、自分たちの意志で決められることは何ひとつない。まあ、そういうものだろうなど冬馬は思っている。仮に「恋人と散歩しているときの顔をしてよ」なんて注文をされたところで上手くこなせる自信もなかつた。それはもう過去に経験していることだつた。

冬馬に恋人はいない。

好きだと言つて、キスを仕掛けてくる相手なら視線の先に居るのだが、それだけだ。自分たちは恋人同士ではない。冬馬の記憶が確かなら「付き合つてほしい」とも「恋人になつてほしい」とも言われたことはなかつた。言つた覚えもなかつた。

その相手——翔太の意図を掴みあぐねているところもある。

翔太の言葉と行動をいたずらだとも、からかわれているとも思つていい。そう勘織る時期はとつくに過ぎてしまった。厄介

なのは、冬馬はそんな翔太のことが決して嫌いではないということだ。さすがに恋愛感情とまではいかないが、流されてしまう程度の情はある。

例えは……そう。北斗に好きだと言われてキスを迫られたらどうだろう。冬馬はペットボトルに口をつけて中身を煽る北斗を見つめた。想像の域を出ないが、きっと北斗のことも受け入れてしまうような予感がする。北斗を拒絶する自分をイメージすることができない。翔太と同じように、北斗にだって情はあるのだから。

そうだ。北斗。翔太は北斗ともキスをしているのだろうか。今まで考えもしていなかつた可能性だが、冬馬としているのならあり得ない話ではない。翔太は北斗のことだって好きだろう。——でも、それはそれで面白くない。よくわからないけれど。なんとなくではあるけれど。そんな風に感じるなんて、翔太にキスをされ過ぎておかしくなってしまったのかも知れない。冬馬は小さく舌打ちをした。

「何？ どうかした？」

「……いや。明日の弁当、おまえの分も作ろうと思つてよ。なんか食いたいもんあるか？」

北斗からさり気なく目を逸らして、冬馬は訊こうと思つていたことを口にした。明日の昼食に弁当を作つてほしいという翔

太の言葉に、夕食のハンバーグを入れても良いのなら、と冬馬はしぶしぶ頷いていたのだ。

「冬馬の弁当？ 久しぶりだよね。俺はなんでも食べるよ」

「なんでもって、それが一番困んだよなあ」

「ごめん。でも冬馬が作るものはなんだっておいしいから、食べたいものが選べないんだって」

「たかが弁当だろ。何言つてんだおまえ」

大げさなことを口にする北斗にこちらも大げさなため息をついてみせる。弁当を作ると言つても、すべてが手作りというわけではない。冷凍食品だつて出来合いのものだつて入れる。けれど北斗なら、ただの白飯ですらおいしいおいしいと言いながら食べててくれるような気がして——冬馬はそんな馬鹿なことがあってたまるかと妄想を打ち消すよう首を横に振った。

……待てよ、と冬馬は考える。北斗が最後に家に来たのはいつだつたか。今朝だってごく自然なことのように翔太は居座つていたが、あの部屋で一緒に食事をとつたのは久しぶりのことだつた。

ほとんど毎日顔を合わせているとは言え、昔と違つて個人の仕事も増えた。仕事が忙しくなればそれだけプライベートをする時間が減る。

黒井の元に居た頃は、黒井がそういう方針だったのか知らな

いがジュピターに単独の仕事が回ってきたことはない。事務所を辞めて自分たちの力だけでやっていた頃もずっと三人一緒にだった。……だからだろうか。ふとした瞬間、寂しいと思つてしまふ。寂しいと、思えるようになつた。二人がそれだけの存在になつてしまつた。

冬馬は視線を落として地面を見つめた。

「……なあ北斗。おまえも近いうちに飯食いに来い。こないだワイン置いてつただろ」

「ん？ ああ。あれね。冬馬、飲んでないよね？」

「ばっ、飲まねえよ！ つ……オレンジジュースの使い道を考えたんだが、凍らせて入れたらサンゲリアになるつて書いてあって、作つてみたんだ。おまえの口に合うとは思つてねえけど、せつかくだし……」

言い訳じみたことを口にする冬馬に北斗はくすりと笑う。

「俺もちょうど冬馬のカレーが食べたいなつて思つてたところ。もちろんサンゲリアと一緒にね」

ぱちんとウインク混じりにそう言われて、冬馬は「おう、任せろ！」と歯を見せて笑つた。作ろうと思えばなんでも作れるが、やはりカレーを所望されると嬉しくなる。

カレーは冬馬が数ある料理の中でも一番手をかけて、時間をかけて。これでもかと極め上げた一品なのだ。レストラン風に

言うのならカレーは冬馬のスペシャリテだった。けれど、きっともつとおいしくなるはずだ。最高のカレーを北斗と翔太に振る舞うことは冬馬自身が望んでいるところでもあつた。

……カレー。食わせてえな。

三人の予定が空いている日はいつだつたか、とスケジュールを思い出そうとしたそのとき。

「冬馬くん！ 翔太くん、そろそろ終わりそうだから準備に入つてもらつてもいいー？」

スタイルリストに名前を呼ばれて冬馬は我に返つた。

「つす。すぐ行きます！」

冬馬は小走りで彼女の元へ向かいながら、やつちまつた、とばつが悪そうな顔をした。髪が崩れるから暴れないで、と小言が多いのが彼女の特徴だ。佐藤という名字の若い女性だが、昔からの顔馴染みということもあり、変に緊張することもない。

「あー。髪触つたでしょ。せつかく固めたのにちょっとよれちゃつてる」

やはりばれてしまつた。佐藤はシザーバッグからワックスを取り出すと冬馬の髪を整えはじめた。

「や……はい。スマセン」

「違和感でもあつた？ 冬馬くんつて普段からワックス使わないし、慣れないだろうけど撮影の間は我慢してね」

仕事人らしくちやきちやきと髪を整え終えると、佐藤は正面と横から、冬馬の髪型を数秒眺めて「よし！ 格好いい！」と満足気に声を上げた。今回は左側の前髪と横髪を後ろに流すようアップにされている。テーマに合わせて髪型もそれらしいものに仕上げられていた。あの北斗だって前髪を遊ばせている。

髪型なんてなんでも良いだろ、と冬馬は思ってしまうのだが、

そういう訳にもいかないらしい。

『変えちゃったほうが女子受けするからねー。特に翔太くんはいじりがいがあるかな。髪型ひとつでみんなに雰囲気が変わる子ってそうそういないもん』

撮影がはじまる前、冬馬の髪をセットしながら雑談の中で佐藤はそう言っていた。そんな翔太は今日、髪を降ろしている。前髪だけが真ん中できれいに分けられていて、額が見えているた。

——雰囲気が変わる、か。

冬馬にはよくわからない感覚だった。どんな髪型をしていたつて翔太は翔太だろう。もしかするとこれは女性にしかわからない感覚なのかもしれない。

「おまたせ天ヶ瀬くん。今回カメラを担当させてもらつてる川島です。いやあー！ 噂には聞いてたんだけど、いいね、ジュピター。一度撮りたいと思つてたんだ」

翔太と入れ替わるように名前を呼ばれて、冬馬は撮影場所に移動していた。途中、翔太とすれ違ったとき「冬馬君もがんばってねー」と声をかけられて「楽勝だぜ！」と返した。

ほらみろ。翔太は翔太だ。

「とりあえず適当に撮つていこうか。この辺を散歩している絵が欲しいな」

「ちょっと走つてみてもいいですか？」

「いいよ。笑顔は忘れずにね」

スタッフから手渡されたリードの先には思ったよりも小さなポメラニアンが居た。ハツハツと犬特有の呼吸をしながらつぶらな瞳で冬馬のことを見上げている。

犬。それがどうした。仕事をするパートナーだ。冬馬はその場にしゃがみ込んでポメラニアンの頬をくしゃくしゃと撫でまわした。そうしていると、すぐ隣でカシャリとシャツターを切る音がした。なるほど、この川島というカメラマン。シャツターチャンスは逃さない男らしい。

「つし！ 行くか！」

冬馬はリードを引いて辺りを歩きはじめた。調子が出てきたところで足を速める。カメラには常に笑顔で応えた。アイドルとして売り出しているからには何かしらのイメージがつきまとう。デビューしたときから北斗には『アイドル王

子』、翔太には『国民的弟』、そして冬馬には『熱血俺様系』というキャッチコピーがついていた。

これらは黒井の元に居た頃つけられたもので、事務所を移籍してからも有効に活用されている。最も、冬馬の『俺様』はすっかりステージの上でのみ發揮されるようになってしまったのだが。ともかく、役でもない限りファンもこの謳い文句に沿った振る舞いを望んでいるはずなのだ。わかっている。ファンの期待に応えるのが自分たちの役目だ。——けれど。

「天ヶ瀬くん。ここで犬を抱き上げてもらつてもいい?」
「……と、こんな感じっすかね」

「うん。そのまま、ちょっと困った顔してみて」
昔がそうじやなかつたとは言わないが、三人とも今のほうが、より『らしい』表情を出せていると冬馬は思う。歌とダンス以外の仕事も増えて、素の自分たちをファンに見てもらえる機会が増えたからかもしれない。——もつと、そのきつかけが増えれば良いのに。誰にも言つたことはないが、冬馬はそう考へている。

キャッチコピーをなぞるのも大事だが、ファンにはもつとたくさんジュピターの魅力を伝えていきたい。これはリーダーとして二人を預かる者の職員目なのかもしれないが、北斗も翔太も、怒つたり驚いたり拗ねてみたり。ほんとうに、色んな顔を見ながら、なんてどうでしょう?」

冬馬は笑つた。

腕の中に居るポメラニアンに頬を舐められて、それが思いの外くすぐつたかった。そんな冬馬を見つめている北斗と翔太の視線には、気づけなかった。

撮影は滞りなく終了し、三人は撮影現場をあとにした。次は

そのまま、喫茶店に転がり込んで雑誌用のインタビューだ。冬馬が出演する舞台の公開が近いということで、その話を多めに乗せるように調整するそうだが、特集の内容に沿つた話がメインであることに変わりはない。

恋愛事の質問にはテンプレートな回答を。

これはアイドルとして活動しはじめた頃、黒井から言いつけられていたことだ。黒井の言葉ではあるが、事実であるため冬馬は今もその通りにしている。特定の相手を意識した答えはアイドル的にはご法度らしい。

「——三人とも、恋人とはどんな所を散歩してみたい?」

「俺は佐々木さんが行きたい所ならどこでも。……ふふ、二人

きりになれる静かな場所がいいですね。それこそ丘の上で夜景を見ながら、なんてどうでしょう?」

「北斗くんらしいわね。じゃあ次は冬馬くん」

「振られちゃいましたか……」

佐々木と呼ばれた記者は小さなノートパソコンをテーブルの

上に広げて、素早いタイピングで北斗の言葉を打っていた。北斗の言葉に表情や態度を変えないところはさすがだ。佐々木とはこの雑誌の契約がはじまってから一緒に仕事をするようになつたのだが、ジユピターの特集が好評なのは彼女の手腕も影響していると思う。

「俺は……そっすね。普通に街中とか」

「今日の撮影みたいな？」

「そんで買い物したいっす」

手元のコーラにささつたストローをくるくると指先で弄びながら冬馬は答える。

「僕は食べ歩き！ 前に冬馬君と北斗君にクレープ買ってきて

もらったことがあるんだけど、あれすっごくおいしかったからまた食べたいな！」

「つて、こっち見て言うなよ。買わねえよ」

「えー冬馬君のケチ。いいもん、北斗君に頼むから」

「俺？ いいよ。あそこのクレープおいしかったしね」

「おい北斗！ 翔太を甘やかすな！」

そんな会話を両脇で繰り広げ出した北斗と翔太にストップを

かける。目の前に居た佐々木が手を止めて控えめに笑った。

「あなたたちって、ほんとうに仲が良いのね」

——仲が良い。

それはもう何度言われたかわからない表現だ。仲が悪い、と言われるよりはマシなのかもしれないが、男三人。言われ過ぎもどうかと思う。自分たちとしては普通に接しているだけだと思うのだが、周りはそう思つていいらしい。

「さっきの話、面白かったから載せちゃおうかしら。えつと、

冬馬くんと北斗くんが翔太くんにクレープを買ってくれたんだ

つけ？」

「俺たちが翔太に敵わないってだけの話ですよ。ねえ冬馬？」

「知らねえ」

ふん、と横を向いて腕を組み北斗の視線から逃れる。けれど、そうすると今度は翔太と目が合つてしまい、冬馬は居心地

が悪そうに濡れたグラスを手にした。

あの会話を事務所でしていたとき、クレープなんて買ってやるつもりはなかった。ただ、クレープ屋の近くを通る用事があつて、たまたま隣に北斗がいて、「そういえばこつて前に翔太が話してたクレープ屋じゃない？」なんてことを口にしたから、あこいつ並ぶ気なんだなと、冬馬もしぶしぶ付き合つただけの話なのだ。

「末っ子にはどうしても甘くなっちゃいますね。仲が良く見えるのはそのせいかもしれません」

柔らかな笑みを浮かべた北斗に、翔太も同じ笑みを返した。やはりこの二人は仲が良い。北斗と翔太の間に流れる空気というか雰囲気というか。そういう生暖かいものに冬馬はどうしたって溶け込むことができずいる。進んで溶け込みたいと思っているわけでもないが。

「なるほど。あまり意識してなかつたけど北斗くんと翔太くんは六つも歳の差があるものね。国民的弟の面目躍如つてところかしら」

「えっへへー」

「さすがって感じですよね。冬馬だって翔太のおねがいに最初は嫌だつて言うんですけど、結局頷いちやうですよ」

「なつ……北斗っ！」

余計なこと言うな、と冬馬は囁んでいたストローから口を離して声を上げる。

「——だから俺たち、恋人のおねだりにも弱いんじゃないかなって思います。散歩中だらうがわがままに振り回されたいといふか。翔太は逆に振り回しちやうかもしませんけど……ほら、そういう茶目っ気も大事でしよう?」

すらすらと歌うように言葉を並べた北斗に冬馬は目を丸くし

た。よく喋ると思ったら、そういう方向に話を持っていきたかったのか。

こういう仕事を受けるたび、北斗の会話運びには毎回舌を巻く。今の冬馬には到底身につけることができないスキルだ。こはもう任せてしまつて問題ないだろう。そのまま佐々木と話し続ける北斗を横目に、冬馬は軽く息を吐いた。

「ねえねえ冬馬君」

隣に座つている翔太から小声で耳打ちされて「なんだよ」と訝しみながら距離を詰める。

「今日、帰りに買い物するって言つてたよね? せっかくだしクレープ食べに行こうよ。北斗君と三人でさ」

……だめ?

そう首を傾げられて、冬馬はぐつと眉間にしわを寄せた。

断られるはずがないと自信満々なくせに決定権は相手に委ねる。翔太の悪い癖で、国民的弟と言われている所以だ。これが「行こうよ」じゃなくて「行くからね」という断定形だつたら良かつたのに。冬馬が付き合わなければいけないよう、道を塞いでくれていたら良かつたのに。冬馬は翔太から目を逸らして口を開いた。

「北斗が行くつーんなら、俺も行く」

食い過ぎて晩飯残すなよ、と続けて冬馬は再びストローを手

にした。「じゃあ決まり」なんてことを口にしながらアイスココアを飲む翔太にならって冬馬も黒い液体を飲み込んだ。心なしか、炭酸が抜けているような気がした。

自分たちはこれからもこうして翔太に振り回され続けるのだろう。わかっている。でも、昔からこうだったわけではない。はじめの頃はお互いのことを知ろうともしていなかった。冬馬にとって北斗と翔太は黒井に選ばれた、同じユニットの、同じ仕事をこなすだけのメンバーだった。

冬馬と北斗と翔太。プライベートでは絶対友人にならないタイプの三人だ。事実、一緒に仕事をするのだからと上手く関係を保てていた部分がある。それがどうして「仲が良い」とまで言われるようになったのか。きつかけはなんだったのか。まるで思い出せない。その記憶だけ抜け落ちてしまつたようだ。

「……ま、とうま。冬馬つてば」

「うおっ!? な、なんだよっ」

北斗に肩を揺すられて、冬馬はハツとした。

「佐々木さんが舞台の話聞きたいって」

「大丈夫? 疲れてるならちよつと休憩挟もうか?」

「あつ、や、このまま続けてもらつて問題ないっす」

心配そうに覗き込んでくる佐々木の提案に首を振る。

来月から開演される舞台に冬馬は出演することになつてい

る。主人公である兄が出来の良い弟を憎しみから手にかけてしまふが、後悔の念に駆られて弟そつくりの人形を作りはじめるという、愛憎がテーマの作品だ。冬馬はこの弟役だった。

生命力に溢れて輝く姿が役と合つてると演出家から褒められた。それから、君には影がまとわりついているね、とも言われた。影。過去が冬馬をそう魅せるのだろうか。黒井と共に歩んだ過去。心無い記者や同業者からは黒い過去だと言われることもある。

冬馬の夢を踏みにじつたのは黒井だったが、冬馬に夢を与えたのも黒井だった。トップアイドル。目指す場所は今も昔も変わらない。

「……俺は一人っ子だから、兄弟の確執とか葛藤とかはよくわからねえけど……でも、」

信じている人から裏切られるのは悲しい。

「——見応えのある舞台になつてるんで。色んな人に見てもらいたいっすね!」

閉じていた蓋をこじ開けてしまつたような心地だった。

思い出したいことは思い出せないので、思い出したくないことに限つてあつさりと浮かび上がつてくる。冬馬にとって黒井との過去はかすり傷のようなものだが、その傷の跡が残つてしまつた。

まっていることに冬馬は気づいていない。

結局のところ黒井のことを憎めば良いのか憐れめば良いのか、感情の着地点が曖昧なのだ。黒井の考え方を理解できるような歳になれば、もっと違ったかたちで決別することができるのかもしれない。だからそのときがくるまで冬馬は蓋をすることにした。優しい記憶でも甘い記憶でもないが、必要な記憶だった。だから心の奥底に大事に閉じておくのだ。

北斗と翔太に出逢えたこと。ジュピターというユニットが生まれたこと。目的や経緯はともかく、それだけは黒井のおかげに違いないのだから。

ペタン。ペタン。跳ねつくような音がキッキンに響く。

「冬馬くーん。これいつまでやればいいの？ 僕もう疲れちゃつた」

「はあ？ まだやつてたのかよ。丸め終わってんならそこの皿に並べとけ」

「うん……。うえ、手がべたべたする……」

「おまえがやりたいって言つたんだろ」

使い終わつた調理器具を洗つていた冬馬が一步ずれて場所をあけると、翔太は流れていた水道水で両手についた肉の脂を落

としはじめた。

「だつて大つきなハンバーグ食べてみたかったんだもん」

「食い意地張つてんなあ」

大小さまざま。いびつな形のハンバーグのタネを眺めながら冬馬は感心したようになに呟いた。そのまま皿全体にラップをかけて冷蔵庫で三十分ほど寝かせることにする。本来ならば一時間は寝かせたいところだが、翔太の胃は待つてくれないだろう。手を洗い終わつて洋室に向かう翔太に「大人しくしてろよ」と声をかけて、冬馬は再び洗いかけの皿に手を伸ばした。

翔太に腕を引かれて連れて行かれたクレープ屋は、夕方といふこともあって以前並んだときよりも人が少なかつた。夕食前だったからかもしれない。数分だけ並んだあと冬馬はイチゴ、北斗はマンゴー、翔太はバナナとチョコレートのクレープを注文した。いつか二人で食べに行つたパンケーキと同じだな、と冬馬は思つたが、翔太がそれに気づいていたのかは微妙なところだ。

北斗は両手にクレープを持った翔太をスマートフォンで撮影して満足気だった。翔太はといふと、手にしていたクレープをあつという間に食べ終えて、零れ落ちそうなクリームと格闘していた冬馬と北斗を「プロデューサーさんにおねがいして今日のブログに載せてもらうね！」なんて笑いながら激写していく

た。一応「やめろ」と言つたのだが、唇の端に白いクリームをつけた二人の写真は今夜、事務所のブログにアップされてしまうことだろう。

冬馬はともかく、北斗のファンにとっては貴重な一枚になるに違いない。北斗と個人的に逢つているエンジエルちゃんとやらだつて、そんな姿、見たことないに決まっている。

そう思うと、まあ悪くねえなと思えてしまうのだった。

今日の夕食のメインはペッパー・ソースのハンバーグ。副菜として野菜のグラッセを添える。ニンジンとブロッコリー、冷蔵庫に入っていたじやがいもも一緒に煮てみた。それから玉ねぎとキャベツのコンソメスープ。当然、明日の弁当にも同じものが入る予定だ。多少のアレンジは加えるつもりだが。

なんとなく。翔太に野菜を食べさせなければという意志が冬馬にはあった。それはもう。まるで使命感のようにな。

『別に僕、野菜嫌いってわけじゃないんだけど』

そんな小言を言われてしまいそうだが、実際そのだから仕方がない。今朝のブチトマトには「げつ」なんて顔をしていたが。冬馬が知る限り、翔太はなんだって食べる。甘いものも辛いものも、なんでもほどほどに。いたつて普通の味覚をしている。なのに翔太には野菜を食べさせたい。

……なんでだろうな？ 冬馬は首を捻った。

泡だらけの手を水で流して、スープが入つている鍋の火を止める。エプロンの裾で手を拭きながら翔太の元に向かうと、テーブルの上には開封済みのファンレターがずらりと並んでいた。これはもう読み終えたものなのか、鞄の中から新たな封筒を取り出している。

「それ、今日もらったやつか」

「まあねー。でも悪口なんてひとつも書かれてないよ。冬馬君もそうだったでしょ？」

「おう」

翔太の隣に腰を降ろして、手にしていたピンク色の可愛らしい便箋を覗き込む。仕事の前に事務所に寄つたとき、冬馬も自分宛てのファンレターを受け取つていたが、それは移動中にすべて目を通し終えていた。

「僕、ファンレターってあんまり好きじゃないんだよね」

「ああ……おまえは昔からそんな感じだったよな」

『先週のミニライブ、翔太くんが楽しそうに踊つてる姿を見ることがでてきてうれしかつたです。あたしはジュビターの中で翔太くんが一番好きです。これからも応援してます』

いかにも女子が書いたような、そんな丸い字が目に留まる。

「俺は好きだぜ。ファンレターラ」

「知ってる。クローゼットの中に大事にしまい込んであるもんね」

呆れたような翔太の口ぶりに返す言葉もない。

冬馬はファンレターが好きだ。翔太が言ったとおり、今までもらったものはすべてファイリングして保管している。ライブ会場でファンの笑顔を見ることも好きだが、言葉を直接届けてもらえる手紙はもっと好きだった。

黒井がジュピターとファンを接触させない方針を取っていたため、ファンレターが特別だったということもある。齋藤の元に落ち着いて、ジュピターは初めて握手会というものを経験した。新曲のリリースイベントでファンから「帰ってきてくれて嬉しい」「またジュピターのライブに行きたい」「信じて待つてた」「三人が大好き」そんな言葉を涙と笑顔とともにもらつたのだが、あれは、良かつた。控え室に戻ったあと、またやられてくれとプロデューサーに頼み込んだくらいだ。

「そっか」

翔太が呟いた。

「だから冬馬君、好きって言葉に鈍感なんだ」

「……は？」

視界がぶれる。肩に痛みが走ったと思ったのも束の間。冬馬の唇は柔らかなものに触れていた。すぐ目の前には翔太が居

た。触れているものは当然、翔太の唇だった。

「しょ、うむッ……！」

名前を呼ぼうと口を開いたとき、ぬるりとしたものが入つてきた。その何かに言葉と呼吸を塞がれる。逃げようともがいてみたが、肩は両方とも翔太に掴まれていて、肘は床についていて、身動きを取ることができなかつた。相手は翔太だ。三つも年下の男。自分のほうが体格も良くて力もあるはずなのに、力を込めてみてもびくりともしない。

翔太とキスをする。それは良い。もう慣れた。慣れてどうするんだと思うが、慣れてしまつたものは仕方がない。けれど、こんなキスは知らない。息ができなくて、溺れそうで。気持ち良さからはずつと遠い。温かいのに苦しいだけのキス。

なんだこれ！　なんだこれ！

口の中にいるものを押し出そうと舌を動かしたとき、ざらりと知った感触がして、それが翔太の舌なのだとわかつた。どちらのものともわからない、はあはあと熱のこもつた吐息が耳に届く。たまに、かちりと歯同士が当たつて、そのたびに冬馬はまぶたに力を込めた。舌を動かすたびに唇の端から唾液がこぼれて顎に伝つたが、まるで金属のようにならかつた。

……肩を。翔太に押さえつけられているせいでバランスが上手く取れない。腕に力を込めてみた瞬間、冬馬の上半身は肘か

らざるりと滑り落ちた。

「うわっ」

「いってえ！」

勢い良く後頭部をぶつけて身悶える。翔太も一緒に崩れ落ちたのか、決して軽くはない身体が冬馬の腹の上に乗っていた。

「……っ……冬馬君」

顔が近い。頬が赤い。目が潤んでいる。そんな状態の、呼吸も整っていない翔太に名前を呼ばれて、ぴくりと身がこわばった。——怖いのか？ 違う。頬に触れた翔太の指先が震えていたから、泣いているのかと思つただけだ。

「好き」

囁きとともに唇が降りてくる。いつもされているような、触れるだけのキス。唇は、あっけなく離れていった。

「冬馬君もはやく、僕のこと好きになつて」

乞うような声でそれだけを告げると、翔太は冬馬の上から退いて、そそくさと部屋から出て行ってしまった。

ピシャリと引き戸が閉められて自室に一人きりになる。けれど次の瞬間、閉められたはずの引き戸が開いた。

「さつきのキス！ 謝らないから！」

顔を真っ赤にした翔太が捨て台詞のように叫んでまた姿を消した。

なんだこれ。なんだこれ。

心臓がうるさい。頬だって火が出ているんじやないかというくらい熱い。冬馬は寝転んだまま横向きになり、自分の身体を抱きしめた。翔太に好きだと言われてキスをされる。それは何も初めてのことじゃない。けれど「好きになつて」と、翔太は

そう言つた。一方的な想いを告げていただけの翔太から、明確な言葉をもらつてしまつた。
指先を、唇に這わせる。熱いと思つていた唇は驚くほど冷たかった。さつきまでここに翔太の、翔太の舌が——。

「……嘘だろ」

意識してしまつたら最後だ。

ドクンドクンと破裂しそうなこの鼓動が、答えなんだろうか？ わからない。人を好きになつたことなんてない。恋なんてしたことがない。でも嫌じやなかつた。苦しかつただけで、嫌じやなかつた。

翔太とあんなキスができるだなんて知らなかつた。

——好き。好きになつて。

切なげな声が頭の中でぐるぐると繰り返される。

翔太が冬馬に言う『好き』が特別な意味の『好き』なのだということはわかる。そこまで鈍いつもりはない。冬馬だって翔太のことは好きだ。けれどそれは翔太の『好き』とは違う。そ

れもわかっている。だから翔太は口にしたのだ。自分のことを、そういう意味で好きになつてほしいと、それを冬馬に願つたのだ。

「つ、俺に、どうしろつてんだよ……！」

好きってなんだ。好きは、好きだろ。好きに種類なんかあるほうが変だ。そう思つてははずなのに。じゃあ翔太とキスをしている自分はなんなんだ。男同士。相手は恋人でさらないのに。キスという行為に嫌悪を感じていらない自分はなんなんだ。

翔太のことが好きなのか？　ああ好きだ。でもこれは恋愛感情なんかじゃない。絶対に。それだけは胸を張つて違うと言え

だつて冬馬の一番は昔から——。昔から？

冬馬はベッドを支えにふらふらと立ち上がつた。

目の前に、カーテンが閉じられていない窓に。眉が下がり、泣きそうになつてゐる顔があった。顔どころか耳や首まで赤くなつてゐる。その情けない表情をしている人物が天ヶ瀬冬馬だと気づくまで、ずいぶんと時間がかかつた。

ベッドに膝をついてカーテンを閉める。乱暴に引いたせいか途中で引っ掛けてしまった。

「クソッ、ふざけんなつての」

うつむいて、何に対するもののかわからない鬱憤を吐き捨

てる。遠くから、さあさあと水の流れる音がした。翔太が風呂に入つてゐるのだろう。

身体はこんなにも熱を持っているのに、思考回路だつて擦り切れる寸前だというのに。それでも頭の片隅で、夕食の準備をしなければと思つてゐる自分がいた。

心臓がある場所に手のひらを当てる。鳴り止みそうにない鼓動に情けなさを通り越し、馬鹿らしくなつてしまつて、冬馬は自嘲的な笑みを浮かべた。

目が覚めたら、冬馬の姿はどこにもなかつた。

翔太はところどころがふわりと跳ねた後ろ髪と同じような足取りで部屋中を歩き回つたのだが、やはり冬馬の姿はどこにもなかつた。キッチンの作業台に大きな紙袋が置いてあつて、中を見なくともこれが弁当なのだとわかる。弁当箱がふたつ。水筒の中身はステップだらうか。紙袋の隣にはたまご焼きとケチャップが挟まつたサンドウイッチがあつた。ラップをめくり、まだ温かなそれをひとつだけ手に取る。

「冬馬君つてほんと……」

その続きを口にすることなく、翔太はサンドウイッチに囁みついた。別に、冬馬にそうあつてほしいと思っているわけでは

ない。

「おいし」

どこか懐かしい味の、四角形のサンドウイッチをぺろりとたいらげる。翔太は二切れ目を持って冷蔵庫を開けた。牛乳を取り出して、いつも使っているカップに半分ほど注ぐ。それをぐくぐくと一気飲みしてもう一度、今度はカップいっぱいに白い液体を注いだ。手にしていたサンドウイッチを唇で挟み、カップと皿をそれぞれ手に持つて洋室に移動する。

起きたときには気づかなかつたが、部屋のカーテンは二箇所とも開けられていた。冬馬だろう。昨晚、ソファで寝ると言つて聞かなかつた冬馬を無理やりベッドに押し込めたのは他でもない翔太だつた。

冬馬に、好きになつてほいと言つてしまつた。自分から仕掛けたことなのに場の空氣に堪えられなくて逃げ出して。冬馬の態度が変わつていたらどうしようか、はらはらしていたはずなのに。いつもより長風呂をしたあと、空腹を満たす匂いにつけられてしまつた。

「うわー！ おいしそう！」

キッチンに立つて冬馬の隣に並び、ジュウジュウと音を立てるフライパンの中身を覗き込んだ。翔太が自分のためにと

一際大きく作つたハンバーグが真ん中を陣取つてゐる。周りに浮かぶソースがバチバチと焦げる音。スペイスのつんとした香り。今すぐ頬張りたくなつた。

「ばつ、危ねえだろ！」

ふわふわとしたパジャマの後ろ襟を掴まれる。油が跳ねたら大変だと思つたらしい。少しだけ高い位置にある顔を見上げれば、冬馬の頬は少しだけ赤かつた。むつとした顔をして、翔太と目を合わせてくれない。……なんで？ そう思いながら「ごめんなさいー」と口にする。

「だつておいしそうだつたから、つい」

笑顔でそう続けてみると、冬馬はあからさまに安堵したような表情を浮かべた。

変な冬馬君。そう思いながら、真っ白な皿の上に並べられたニンジンを指先で摘んで口に運ぶ。つやつやとしているこれはグラッセというらしい。冬馬が教えてくれた。レストランなんかではよく目にするし口にもするが、御手洗家の食卓に出てきたことはおそらく一度もない。

口の中に放つたニンジンを奥歯でつぶせば控えめな甘さが広がつた。人工的な甘さのはずなのに、これが本来の甘さなのではないかと錯覚する。それくらい舌に馴染む味だった。

「こら。意地汚えことすんな」

「だって僕もうお腹ペコペコなんだもん。ちょっとくらい味見したっていいでしょー?」

「もうちよいで焼けっから、おまえはあっちで髪でも乾かしてろ」

「はーい」

翔太はこのとき、数十分前に冬馬との間に起こったことをすっかり忘れてしまっていた。

言われた通り髪を乾かしているときも、出来上がった夕食を食べていたときも、満腹になってベッドに寝転んだときも、写真がちゃんとブログにアップされているか確認したときも、北斗が出演しているドラマを見ていたときも、もう寝ようと口にしたときも。狭いベッドに二人並んで目を閉じていたときだって、忘れていた。

「あー……やつちやつた……」

意識してほしかったはずなのに、自分が相手を意識せずに過ごしてどうする。テーブルの上に皿とカップを置いて翔太は一人うなだれた。

冬馬に抱いている感情が恋なのか、それは翔太自身も掴みあ

ぐねていた。だって、冬馬と一緒に居たつて四六時中ドキドキするわけではないのだ。これが恋だったなら、きっと同じベッ

ドで眠れるわけがない。幸せで、満たされて、甘酸っぱくて苦しくて。恋とはそういうものだろう。

——冬馬を独り占めしたい。

翔太が自覚している想いはこれだけだ。

くだらない独占欲だと思う。子どもみたいな願望だと言つたほうが良いのかもしれない。実際子どもなのだから、これくらいのわがままは許されたいのだけれど。

冬馬は自分のものだと主張するように。あるいは場の空気を変えるために口付けて、忘れた頃に好きだと言つてみる。最近はもう、コミュニケーションの一環のよう受け取られているのか、冬馬は流すばかりで照れもしなくなった。

初めは、かわいらしい反応を返してくれていた。唇を寄せるたびに少女のように顔を赤くして「まで」「ダメだ」と否定の言葉を吐いていた。駄目だと言う冬馬の言葉を無視して指先同士を絡めたときのことを、翔太は今でも覚えている。

じんわりと汗ばんだ手のひら。冬馬がつけていた香水の匂い。——そう。昔の冬馬はシトラスの香りを身にまとっていた。

「僕、好きなんだ。冬馬君のこと」

まだ黒井の元で仕事をしていた頃の話だ。キスをしたあと、信じられないものを見るような目をしていた冬馬を懐柔するた

め、もっともらしい台詞を平然と言つてのけたのは。嘘をつくのは得意だった。嘘を嘘だと見抜かれない自信もあつた。嘘をほんとうにすることも、あのときは、できると思った。

冬馬を奪いたかった。誰から奪いたかったのか、今となつてはわからない。黒井かもしけないし、北斗かもしけない。もつと別の、ステージの向こう側にいる人々かもしけなかつた。冬馬を奪つて、それから、翔太のことだけを見てほしかつた。あの、何もかもを射抜くような瞳で。誰かの思い通りになる冬馬なんて冬馬じゃないと知りながら、それでも。

奪うたために何をしようかと考へて、手つ取り早くキスをして

みようと思つた。冬馬の唇が誰にも触れられないと知つて

いたし、キスは好き合つている者同士がするものだという知識があつたから。キスをして、好きになつてもらえたラッキーだと思つた。北斗も知らない、二人だけの、秘密。特別な関係。それは翔太にとって恐ろしいほど甘美な響きだつた。

この独占欲と好奇心と憧れをないまぜにした感情を、恋だと呼んでも良いのなら、確かに翔太は冬馬に恋をしているのだろう。恋と呼ぶにはほんのちよつびり自己中心的で歪んだ想い。

執着とは違うはずだ。

ちよつとつづくだけでころころと表情が変わる冬馬のことが好きだと思う。年上なのに、かわいくて面白くて。もうお手上

げに近い状態だつた。けれどステージの上に立つてしまえば相手が誰であろうが、たちまち魅了してしまうのが天ヶ瀬冬馬という人間——アイドルだつた。その二面性を知れば知るほど、翔太は冬馬にのめり込んでいった。

燐々と燃え続ける炎のように、いつも煌めいている人。美しい人。なのに、ふとした瞬間に消えてしまいそうな物悲しさもあつて、目が離せなくなる。夢中になつてしまふ。虜になつてしまふ。一度目撃してしまえば、誰だつて冬馬のことを好きにならざるはずなのだ。そうやつて翔太も冬馬のことを好きになつた。だからこそ。

——はやく、僕のこと好きになつて。

冬馬と恋人同士になりたいわけでも愛を囁き合いたいわけでもなかつたが、反応がないのも面白くなかった。きっと翔太は冬馬に好きだと言いついたのだろう。そうでなくとも冬馬は愛される人間なのだから、この行為と言葉が当たり前になつてしまつては困る。特別が普遍のものになつてしまつては意味がない。

あの言葉は賭けだつた。冬馬と翔太の関係を、もしかしたらジユピターという世界を壊してしまうかもしれない、そんな期待と不安を一緒くたにした言葉だつた。そしてあれば、今の翔太に言える精一杯の想いでもあつた。

「うう、恋……恋ってなんだろ……」

食べかけのサンドウィッチを皿に戻してテーブルの上に頬を乗せる。長い前髪が目にかかるすぐったい。はあ、とため息をついて翔太はぐりぐりと額を押しつけた。

カチコチと、壁に掛けられている時計の秒針を聞きながら昨日のキスを思い出す。冬馬の内側の柔らかさ。熱かった。もつと近づいてみたい、触ってみたいと思った。冬馬本人でさえ知らない冬馬を暴いてみたい。黒井も、北斗ですら知らない冬馬を見てみたい――。

そんな欲ばかりが膨らんで、翔太はいつも空腹だった。あともう少しで満たされそうな予感はしているのに。その、あともう少しが遠すぎる。

ブブブ。

充電器に繋いでいたスマートフォンが震えた。顔を上げて立ち上がり、コンセントに近づく。母さんかな。ほんとに帰らなかつたし、などと思いながら画面をタップすると、そこに表示されていたのは今まさに翔太を悩ませている人物の名前だった。冬の馬。冬馬君。

『朝飯食ったか?』

送ってきたメッセージはそれだけだった。

翔太は前髪を軽くかき上げてから『今食べてる』とだけ返信

した。一人だとどうにも食べる気にならないということを冬馬は知っているから、この言葉には「残さずにちゃんと食うんだぞ」という意味も込められているはずだ。料理好きな冬馬が手軽に食べられるものを置いて行ったのもそれが理由だろう。

『食い終わった皿は流しに置いてけよ』

きれいな歯型がついたサンドwichを右手で掴んで口元に運んでいると、そんな言葉が返ってきた。全く。食事のことになると冬馬には敵う気がしない。翔太は苦笑しながら一人きりの食事を再開した。

自分はこんなにも頭を抱えてるというのに、普段と変わらない冬馬に少しだけ不満を覚えながら。

午前中はダンスレッスンが入っていた。トレーナーと二人で映像をチェックしながら完成度を高めていく。大型のライブを控えているというわけでもないが、翔太に舞い込んでくる仕事はどうしてもトーキやダンスが中心のものばかりだった。

収録でもイベントでも、一人で踊ることが増えた。ジュピターのパフォーマンスはどうしても三人のバランスを重視したものになっているため、これは、機会があるのなら存分に力を発揮しておくべきだというプロデューサーの考えなのだろう。も

つと別の仕事もと思っているが、北斗のドラマ撮影が今月で終わり、来月からは冬馬の舞台がはじまる。だから次は僕かな、なんてことを翔太は密かに期待していた。

翔太は演技も好きだ。特に、自分の思想とかけ離れた役を演じていると、思いがけない出逢いをしてしまったような気持ちになる。思ってもない感情を言葉に乗せることも、それを表情に出すことも楽しくてしようがなかつた。

「これ、ダンスとは関係ない話なんだけどさ、アリちゃんって恋人とかいる？」

レッスンが終わってクールダウンをしているとき、背を押してくれたいたトレーナーの有浦にそんな話題を振った。有浦はプロデューサーと変わらないくらいの年齢で、ダンス留学の経験者でもある。翔太の講師としては申し分ない逸材だった。ダンス一筋の人だから期待しているような答えは返つてこないかもしれない。そう思いながら鏡越しに見つめていると、彼女は声を上げて笑つた。

「恋人？ あはは、いないないい」

「うそ、今まで一人もつてことはないでしょ？」

「残念ながら今まで一人も。もうこのままあたしの人生ダンスで終わっちゃうかも」

楽しそうに笑つてみせる有浦にそれ以上のことは言えず、翔

太はふうんと相槌を打つた。ダンスで終わる人生。それも良いのかもしれない。好きなことだけをやって生きて、後悔のないまま死ねるのならそれは理想の人生だろう。

「なあに？ 翔太くん、好きな子でもできたの？」

女性らしく瞳を輝かせる有浦の姿は姉たちのようだつた。弟をからかうことが大好きな姉三人。小さい頃からかわいがられて、同じくらい揉まれてきた。自分の人格は姉たちによってに作られたようなものだと翔太は思つてゐる。だから年上の人間といふと気が楽なのだ。もちろん女性に対する対応も心得ている。

「まっさかー。アリちゃんきれいになつたなつて思つたから、何があつたのか気になつただけ！」

立ち上がりつて、タオルとボトルを持つ。

「ありがと。時間だから僕もう行くね」

にこにこと微笑みながら翔太は有浦を残してレッスンルームをあとにした。話題を切り上げたことを彼女は察してしまつただろうか。それでも良かつた。いくらでも取り繕える。無邪気で無知な十四歳を演じることは翔太にとつて日常だ。違和感を覚えたとしても、笑つて、何も知らないという顔をすれば大抵の大人は騙されてくれる。

——だから、そういう意味では北斗は厄介な相手だった。

「翔太。何かあった？」

事務所に戻り、会議室で遅い昼食を食べていると北斗はきつぱりと言い切った。冬馬が作ってくれた弁当箱を開けて、おいしそうだねと笑って。そこに鎮座していたのが、デミグラスソースがたっぷりとかかったハンバーグだったから、昨日はスペースがたっぷり感じのソースだったよと報告して。いただきますと二人同時に手を合わせたところまでは良かった。

一口、二口と。弁当を無言で食べ進めていたのだが、北斗は前触れも重々しさもなくそれを口にした。今日の晩飯何が食いたい？ と、冬馬が自分たちに尋ねるときのほうがよほど切羽詰まっているように思えた。

「——もしかして顔に出てる？」

「出でる出でる。冬馬だつて気づくと思う」

「あー……ちょっとね、アリちゃんに悪いことしちゃったかなつて。自己嫌悪っていうか、反省してるだけ」

「梨沙さんに？ めずらしいね」

「今度謝るから大丈夫。……それより北斗君。この水筒の中身、気にならない？」

机の上に置いたままの水筒を手にして、向かいに座っている北斗にいたずらを企む子どものような笑みを見せる。北斗の言葉を待たずにキュッと水筒の蓋を回せば、ぶわっと酸味を帯び

た香りが会議室中に広がった。

「おっ。トマトスープだ」

昨日のコンソメスープにトマトを足したのだろう。紙袋の中に入っていたプラスチックのカップを手にした北斗に「貸して」と言わされて水筒を渡す。待っているとすぐにスープが注がれたカップを手渡された。

「ま、梨沙さんもさっぱりしてる人だから。謝れば笑って許してくれるよ」

さっきの話はあれで納得してくれたらしい。大雑把な言い方ではあつたがほんとうのことでもあるから、目をつむってくれたのかもしれないかった。

北斗に誤魔化しは通用しない。ユニット内で一番年長というだけあって冬馬と翔太のことをよく見ている。冬馬だつたなら違和感を抱いて終わることでも、北斗には見抜かれてしまう。厄介だが、それを嫌だとは思わないのは北斗の人柄も関係しているのかもしれない。心を震ませるもやのようなものに、柔く触れられるのは嫌いじやなかつた。

「冬馬の作るたまご焼きってやっぱり甘いんだな」

スープを飲んでいると、北斗がそんなことを口にした。弁当箱の中にはハンバーグの他に野菜のグラッセとケチャップが和えられたスペゲティ。それから、きれいなきつね色のたまご焼

きが入っていた。

翔太はカップを机の上に置き、たまご焼きを箸で掴んで口元へ運んだ。

「……そういえばそうだね。うちのはしょっぱいや」

「俺の家も塩が入ってたよ。だから初めて冬馬のたまご焼きを食べたときは結構衝撃でさあ」

——でも、好きだなって思ったんだ。

北斗は微笑みを絶やさずにそう続けた。

冬馬の作るたまご焼きは甘い。稀にカニカマやワインナーが

入っていることもあるが、たまご自体は変わらず甘かった。今

朝のサンドウィッチに挟まっていたたまごも甘かった。一度作

っているところを見たことがあるが、砂糖と醤油を混ぜていたような気がする。それが当然だと言うように自然な所作をしていたから、翔太は「なんで砂糖と醤油なの?」と訊くこともできなかつたのだ。

「こういうのを『お母さんの味』って言うんだろうね」

北斗がしみじみと言つた。

——お母さん。

冬馬の母親は故人だ。いつ。どうして。そこまで深いことは知らない。ただ、冬馬がまだ神奈川に住んでいた頃。冬馬の家に遊びに行くたびに翔太は彼女の写真に挨拶をしていた。だか

ら親近感というのか懇意というのか……そういう感情はあった。逢つたことなど一度もないのに、まるで友人のような気持ちを一方的に抱いていた。

額の中で活発そうな笑みを浮かべているその人は冬馬そつくりだった。隣に座っていた北斗が「冬馬ってお母さん似なんだ」と静かに語りかけると、本人は「よく言われる。自分じゃわからねえけど」なんて唇を尖らせながらそっぽを向いていた。今思い返しても、冬馬の、あのなんとも言えない顔は他の場面では見たことがない。

翔太は手に持つていた箸を置いた。

……このたまご焼きは、冬馬君のお母さんの味?

冬馬君がお母さんから教えてもらつた味なのかな。

心臓の辺りがきゅうっと締めつけられるような痛みを感じた。母が作るしょっぱいたまご焼き。姉たちが作るたまご焼きも同じ味だ。だから、北斗の言葉の通り、これはそういうことなのだろう。

泣いてしまいそうだった。一人でキッチンに立つ冬馬のことが愛おしくて。涙がこぼれてしまうかと思った。翔太に冬馬の気持ちはわからない。もしかしたらたまご焼きを作るたびに母親のことを思い出しているのかもしれないし、そんなことはないのかもしれない。なのにこんなにも胸が締めつけられている

のは、冬馬とその母親の繋がりのようなものを体感してしまったからだろうか。

「……翔太？」

黙り込んでいると、心配そうな声色が耳に届いた。

「なんでもない、と翔太は呟いた。

「——僕も好きだよ。冬馬君のたまご焼き」

愛だと思った。自分が冬馬に抱いている気持ちは恋ではなく、愛だと。恋と愛の違いなんて翔太にはわからないけれど、冬馬は「そんなもんいらねえ！」なんて言うかもしれないけれど。それでも無性に、冬馬のことを抱きしめてあげたいと思ったのだ。

件の色男は「アピールポイントが多いほうがいいんだよ」なんて言つて得意気に笑つてみせた。

冬馬の料理を家庭的で親しみやすいと表現するならば、北斗の料理は華やかでお洒落だ。作る人間の人となりがここまで反映されるのだから食す身としては面白い。これで味が悪いのならオチがつくのだが、北斗の料理は味まで完璧だった。

「これ。翔太のために買つておいたんだ」

キングササイズのベッドに寝転んでスマートフォンを触つていると、風呂上がりの北斗が巨大なアイスクリームを乗せた平皿を持ってやって来た。そのアイスクリームを目にした瞬間、翔太は勢い良くスマートフォンを放り出して跳ね起きた。

「覚えててくれたの？！ さつすが北斗君！」

チョコレートとバニラアイスがレースのようにひらひらと折り重なったケーキのようなアイスクリーム。包丁で切りながら食べることを想定されたこのアイスクリームの存在を知ったとき、翔太は「一本丸ごと食べてみたい」と口にした。北斗はそれを覚えていたのだ。

ベッドに座りなおし、手渡されたスプーンを使つて端から食

べ進めていく。北斗は反対側からスプーンを差し入れていた。

掬つていたアイスクリームを「あーん」と言いながら差し出せば、素直に食べられてしまう。翔太も北斗が掬つてくれたもの

タ食は北斗手製のパスタだった。お得意のカルボナーラではなく、最近はまっているのだというレモン風味のシーフードパスタ。これもイタリアの友人からレシピを教えてもらつたらしい。輪切りのレモンが入つていてパスタを翔太は初めて食べた。

「北斗君も料理作るの好きだよね。作るのってめんどくさくない？」

「フォークにパスタを巻きながら、からかうように指摘すれば

を食べた。自分の手で食べないだけで格別においしいと感じてしまうのはなぜだろう。

パーティ向けのアイスクリームは一人が消化するよりも早く溶けていく。それならも、醍醐味のようで楽しかった。きっと冬馬なんかは包丁で切り分けたものしか食べさせてくれないのでだろう。その点、北斗は翔太とよく似た冒険家だった。

「ところでさ、翔太の家出の理由。俺、まだ聞いてないんだけど」

輪郭を失ったアイスクリームが乗った皿を翔太のほうに寄せながら北斗は切り出した。もう外側のチョコレートは溶けていて、バニラアイスと混ざりマーブル色になっている。翔太は液体になってしまった部分をスプーンで掬い舐めると、突き刺さる視線から目を逸らした。

「笑われるから言いたくない」

「……冬馬のせいなんだって？ あいつ何したの」

「なんにもしないよ。ぜんぶ僕が悪い」

冬馬君のばか。なんでもかんでも北斗君に喋っちゃってさ。

そうやって頬を膨らませていると、北斗の白い指先が翔太の横髪を撫でた。指先はそのまま、長い髪を耳にかけてしまう。

「……俺は事情を知らないから頷くことも否定することもできないけど、『自分が悪い』なんて言葉で自己解決したつもりに

なるのは良くないと思う。冬馬だってすごく心配してたよ。

『俺が原因なんだつたら詫びに行かねえと』って言つてたから、近いうちに菓子折りでも持つて行くんじゃない？』

自分は蚊帳の外に居るのだという態度を崩さず、あくまでも第三者の視点でものを語る北斗にぐうの音も出ない。翔太は深くため息をついた。菓子折り。冬馬なら本気でやりかねない。そうなる前に誤解は解かなくてはならない。——けれど。

……ほんとうに、くだらない親子喧嘩をしているだけなのだ。売り言葉に買い言葉。出て行けと言われたから出て来た。

実際は、そんな強い言葉じやなかつたけれども。

「あ、ちょっと待つて。冬馬からだ」

鳴り響いたスマートフォンを手にして翔太に断りを入れると、北斗は「お疲れ」と画面の向こうにいる冬馬に声をかけはじめた。ナイスタイミングだよ冬馬君。止まっていた手を動かして、翔太は再びアイスクリームを胃の中に収めていく。北斗がうんうんと頷いたり笑つたりする合間に、ノイズが混じった冬馬の声が聞こえた。

「明日？ 俺は大丈夫だけど、昨日の今日でって——冬馬、おまえ気にしてたんだろ。はいはいわかった。はいはい。あ、翔太に代わろうか？ ……そう？ おやすみ」

スマートフォンを耳元から降ろした北斗が翔太を見つめて破

顔した。

「冬馬が『明日の夜俺んちに来い』ってさ。カレー作ってくれるらしいよ」

「泊まり?」

「そうなるかな。明後日はオフだし、たぶんワインも飲むだろうし。まあ正確には『飲まされる』なんだけどね」

仕方ないなあ、と口元に手を当てて笑う北斗に翔太はきょとんとする。何か、二人の間で約束でもしていたのだろうか。

「ていうか！ 冬馬君さあ！ 僕と話したくないみたいな感じじゃなかつた!?」

く。

「ああそれね。冬馬のやつ『うるせえからいい』だって」

「失礼すぎるでしょ！」

「あははは。まあまあ、冬馬も今帰つてきたみたいだつたし、その件については明日一人でじっくり話し合つたらいいよ」

「んー……：そうする」

投げやりに頷いて、平皿を両手で掴むとアイスクリームだつたのを直接飲んで流し込んだ。北斗は何も言わなかつた。はしたないとも行儀が悪いとも。それが心地良くて、少しだけ物足りない。これが冬馬だつたら。家族だつたら。

「——で。『感想は？』

翔太の手から空っぽになつた皿を奪つた北斗が浮ついた声色で尋ねてくる。自分から訊いておきながら、北斗は翔太の返答を待たずにベッドから立ち上がりとキッチンに向かつた。いつもこうだ。北斗と翔太は兄と弟の役割をきれいに分け合つてゐる。実際のきょうだい関係がそうなのだから、きっとこれが自然なかたちなのだろう。最も、翔太の姉たちは北斗ほど甘くはないだけれど。

「もう最高。冬馬君に自慢して、うんと拗ねさせちゃう」

ぼすんとベッドに寝転がつてスマートフォンに手を伸ばすと、二十三時を過ぎていた。具体的な時間を意識すると急に睡魔が襲つてくる。それと同時に、冬馬はこんな時間まで練習をしていたのかと感心してしまつた。仕事の合間、控え室で台詞の練習をしている冬馬を見たことがあるが、台詞とは言え冬馬の口から『兄さん』という言葉が出たことに驚いたものだ。

兄に殺される弟。弟は兄に首を絞められて、ろくな言葉も交わさずに彼らの関係は終わる。なのに兄は弟の亡靈に取り憑かれて、弟を求めるようになるのだ。目を開かず、言葉を発さず、呼吸すらしない。兄はあの日殺した弟と瓜二つの人形を愛でる日々に陶酔していく。

翔太には難しい話だつた。原作の漫画を読むかと冬馬に勧め

られたこともあつたが、怖くて読む気になれなかつた。それでも舞台のチケットは貰つてゐるので、北斗と一緒に観に行く予定ではある。

「……ねえ北斗君。昨日佐々木さんと舞台の話してたとき、冬馬君ちょっと変じやなかつた？」

「ああそれ、翔太も気づいてた？ うん。心ここにあらずつて感じだつた」

汚れた食器をまとめて洗う北斗の隣に並んで、家から持つてきた歯ブラシに歯磨き粉をつける。どうやらあのとき冬馬の様子に違和感を感じていたのは翔太だけではなかつたらしい。

「めずらしいよね。仕事中にあんな風になるの」

「まあ、冬馬も割と役に引っ張られるタイプだからね。あの舞台の演出家って俺たちのことをデビューしたときから知つてゐみたいだし、もしかして何か言われたりしたのかも」

「……昔のほうがよかつた的な？」

「あんまり考えたくないけど」

それからしばらく、無言の時間が過ぎた。

黒井の元に居た頃のほうが良かった。そう思つてゐるファンが少くないことを翔太は知つてゐる。SNSで検索すれば一発だ。翔太がファンレターを好きになれない理由はここにあるのかもしれない。本人の目には届くはずがないと思つて吐き出

される本音を知つてゐるから、本人に読まれることを想定して書かれた手紙の言葉を薄っぺらく感じてしまうのだ。そして、匿名で書かれた本音のほうが正論で暴論だということも翔太は知つてゐた。

黒井の元に居た頃のほうが良かった。それもまあ、正論だろう。潤沢な資金に、華やかで大きな仕事。トップアイドルを目指している人間なら誰もが羨む大手事務所。けれど、あそこでは無理だつたのだ。あそこで得た名声に意味はなかつた。冬馬が「もう黒井のオッサンとはやつていけねえな」と呟いたときのあの表情を、あの声色を。北斗と翔太以外の人間は知らないから。そんなことが言えるのだ。

黒井は最後までジュピターのことを信じてはくれなかつた。結果がわかつていなき勝負には乗れない、利己的で堅実な大人だった。それでも冬馬は黒井のことを信じようとしていたし、黒井にもそれを求めていた。自分たちのことを信じて任せてくれるだろうという期待を最後まで捨てることができなかつたのだ。

——結局、二人の想いが交差することはなく、冬馬は黒井の元から去ることを選んだ。それで良かったと翔太は思つている。北斗だってそうだろう。信じることが愛ならば、ジュピターは生みの親である黒井崇男に愛されてはいなかつた。ジュピ

ターを誰よりも信じて、愛していたのは他でもない冬馬だった。だから北斗と翔太は今もこうして冬馬の隣にいる。それが自分たちの答えであり、進むべき道だった。

「俺たち。そんなに変わったと思う？」

泡だらけのスポンジを握りしめた北斗が呟く。

「俺は冬馬と翔太に出逢って、一緒にアイドルをするようになつて、トップアイドルも目指すようになつて……毎日が楽しくてしょうがないよ。昔も今も変わらないって思つてたけど、周りから見たらそうじゃないのかな」

翔太は一瞬だけ考えた。

「……うーん。もしかしたら僕たちを見る周りの目が変わったのかも。ほら、僕たちってああいう売り出し方をされてたわけだし」

「——ああ、それなら一理あるかもね」

「自分たちは黒井に愛されてはいなかつたが、大事にはされて

いたはずだ。黒井にとつてジュピターというアイドルユニットは磨けば磨くだけひかる原石のようなものだったのだろう。あ

くまでもビジネスの、商品としての話だが。冬馬が芸能界のし

がらみを知らずにいたのも、ある意味、黒井の思惑のうちだつたのかもしれない。

「昔の僕たちのほうがいいって言われてもさ、無理なものは無

理だよ。もうあの衣装を着てステージに立つことはできないもん」

北斗の言葉を待たず、逃げるよう洗面所へと向かう。

コップに水を注ぎながら翔太は思考を巡らせた。自分たちに変わったものなんて何一つない。けれど変わらずに居続けるというのも無理な話だ、と頭では理解している。事実、ジュピタは事務所を移籍した。プロデュースをしてくれる人が変わった。売り出し方が変わった。そう考えれば、ジュピターを取り巻く環境は大きく変わったのかもしれない。それを『進化』ではなく『劣化』だと言う人もいるだろう。でもどれだけ祈つてみたところで過去には戻れない。誰がどんなに願つたって、ジュピターが再び黒井の元で活動するなんてことはあり得ないのだ。

そんなささくれ立った気持ちを、翔太は口の中の歯磨き粉と一緒に吐き捨てた。

人間、変わることを恐れていては、先になど進めない。

「よう。早かつたなおまえら」

したり顔で北斗と翔太を出迎えた冬馬に、二人は目を合わせて笑つた。部屋の奥から食欲をそそる香りが漂ってきて鼻孔を

刺激する。大好きな冬馬のカレー。食べるのは久しぶりだ。肉？ 魚介？ それとも野菜？ 今日のメインはなんだろう。

用意をするから先に帰る、と事務所を出て行つたときの冬馬の浮かれっぷりにはプロデューサーもくすくすと笑つていた。

冬馬の足音が聴こえなくなつた頃、「このあと何かあるんですか？」と二人に向けられた疑問に答えたのは北斗のほうだつた。

「今日はカレーの日なんです」

翔太も初耳なことを北斗は自慢気に言つてみせた。

——カレーの日。なるほど。それは良い表現だ。だつてそれだけで、これから何が起ころのかわかつてしまふ。

「だからあんなに楽しそうだったんですね。冬馬さん」「まあねー。あ、でも仕事中はちやあんとしてたから安心してね。プロデューサーさん」

「ええ。そこは心配していませんよ。三人とも明日はオフですし、しっかりと休んで疲れを取つてきてくださいね」

書類をテーブルに広げているその人に柔軟に微笑まれる。北斗と翔太は感謝しながら事務所を出た。お疲れさまですと声をかければ同じ言葉がいくつも返つてくる。むず痒いような嬉しいような、ほわほわとした、よくわからない気持ちだった。

冬馬には「ゆっくりして来いよな」と言っていたが、そこ

まで時間を掛けるつもりはなかつた。寄り道をするような場所もなければ理由もない。翔太は北斗の車に乗り込むと、どうしよつかと困つたような表情を作つた。「……お土産でも買つてく？ ケーキとか」深く考えず口にした言葉だったが、北斗はいいねと頷いてくれた。

早速、北斗のエンジェルちゃんおすすめのケーキ屋に移動すると二人はタルトケーキを三つ買つた。一番人気のチヨコレートタルト。真っ白なケーキ箱を大事に抱いて、冬馬の部屋に向かう。エレベーターから降りればふわりとカレーの香りがした。

冬馬にタルトを渡して部屋に上がり、翔太は定位位置についた。キッキンを横切るときに盗み見たが、大きな鍋に蓋はされていなかつた。少し待つていたら出てくるんだろうなど内心ほくそ笑む。ケーキ屋にいた時点でグルルと鳴り続けていた翔太の腹はもう限界だつた。

冬馬はスペースからカレーを作る。特に、新しいものや珍しいものを手に入れるとなそのスペースを使ったカレーを食べさせてくれるが、正直なところ何が違うのか翔太にはわからなかつた。辛いか、甘いか。明確にわかる違いはこれくらいのものだ。それでも冬馬のカレーはいつもおいしかつた。

「冬馬、こっちのサラダとグラス運んじゃつていい?」

「おう。ワインも持つてけ」

「……これ、やつぱり減つてない?」

「だから飲んでねえって!」

「あははっ、ごめんごめん。冗談だつてば」

キッキンから聞こえてくる二人の会話に翔太はくすくすと笑つた。北斗は酒が好きだ。そして冬馬も、たぶん好きだ。

この部屋に北斗が初めて酒を持ち込んだとき、冬馬はそれを咎めもせず、あろうことかグラスを手にして「俺にも少し飲ませろよ」と言つたのだ。驚いたのは北斗と翔太のほうで、そんな二人の反応に自分の発言がおかしいと気がついた冬馬は「忘れる!」と慌てていた。聞けば冬馬は昔からたびたび飲酒をしていたらしい。親も何も言わなかつたし、友人たちとも一緒になつて飲んでいたと。そしてそんな過去に一人頭を抱えはじめた。……結局、冬馬は成人するまで二度と酒は飲まないと北斗と翔太に誓つたのだ。

「北斗君ってほんっとお酒のことで冬馬君をからかうの好きだよねえ」

テーブルにサラダとグラス、ボトルワインを並べて北斗を見つめながら口にする。まあね、と微笑む北斗に「いじわるだなあ」と独り言のように呟けば「だつて面白いから」なんて言

葉が返つてくる。

「面白くねえだろ!」

頭上から振ってきた言葉に翔太は今度こそ声を上げて笑つた。

冬馬の両手には大盛りのカレーが乗つた皿があつた。むすつとした表情とは裏腹に、それはコトリと静かな音を立てて丁寧に置かれる。皿から漂う湯気には、待つてましたとばかりに舌なめずりをして、翔太はスプーンを手にした。早く早く、とキッキンと洋室を往復する冬馬を待つ。

今日のカレーは、いつものカレーよりも水っぽい見た目をしていた。材料をペースト状にしているのか、牛肉のブロックがその存在を大きく主張している。

「北斗」

ようやく腰を下ろした冬馬が、オレンジ色の氷が入つたグラスに赤い液体を注いでいく。何? と首を傾げれば北斗から「サングリアっていうんだよ」と教えてもらえた。そんな北斗は翔太の前に置いてあるグラスにリンゴジュースを注いでいた。そのまま冬馬のグラスにも同じものを注ぐ。もう食べていいく? と口にはせず視線だけを冬馬に投げつければ、やれやれと頷かれて。翔太は大きく息を吸つた。

「いつただつきまーす!」

パンッと勢い良く両手を合わせてカレーを掬う。水っぽいルウは白飯に染み込んでいた。細かく碎かれた、種のような皮の

ようなものはスペイスなのだろうなと一目でわかる。ぱくりとスプーンに食いつけば、思った通りの味が広がった。翔太好みのほど良い辛さに舌鼓を打つ。

「んんーっ！ 辛いけどおいしいっ！ やっぱり冬馬君のカレーが一番だなあ」

「やっぱりってなんだよ。当然だろ」

「うんうん。うちの母さんのカレーだとちょっと物足りないんだよね。この前『冬馬君のカレーのほうがおいしい』って言つちやつたんだけど、そしたら『そんなに冬馬くんのカレーがいいなら冬馬くんちの子になっちゃいなさい！』って怒られちゃつて……あつ」

三人のカレーを食べ進める手が止まる。

翔太の頬にかああと熱が集まつたのは、きっとカレーを食べているせいだけじやない。

「おい翔太。おまえまさか……」
「……それが家出の理由？」

二人の視線が痛い。北斗の言つたとおりだった。家出の原因は、翔太が母に冬馬の作ったカレーのほうがおいしいと言つてしまつたこと。それに呆れた母の言葉通り、翔太は冬馬の家に

やつて來たのだ。

「……二人とも笑つていいよ」

「いや、笑わねえよ……つーか笑えねえだろ……」

「なるほどね。だから『冬馬のせいだけ悪いのは翔太』だつたんだ」

納得したように北斗が頷く。

冬馬は気まずそうに自身の作ったカレーを見下ろした。自分のカレーが一番おいしい。そこに疑問はない。そこらのカレーハウスのものと比べたつてこのカレーのほうがおいしいに決まつている。——けれど。翔太が自分の母親のものと比べて「冬馬のカレーのほうがおいしい」と言つてしまつたことについては、じんわりと罪悪感のようなものが湧いてしまつた。嬉しいことを言われているはずなのに、それは違うだろと翔太を咎めたい気分にすらなつた。

「知ってる？ 翔太。『お母さんの味』って言われる料理にはカレーも含まれるらしいよ。冬馬のカレーが冬馬にしか作れないように、翔太のお母さんが作るカレーはお母さんにしか作れない。……味はともかくさ、きっとお父さんやお姉さんにとっては特別な味なんだと俺は思うけど、どう？」

北斗の耳触りが良い声色が部屋を満たす。

「……ま、北斗の言うとおりだな。俺のカレーはいつでも食え

んだろ。いつでも作ってやる。親なんていつ居なくなるかわか
んねえんだ。大事にしといて損はないぜ」

そうぶっきらぼうに冬馬は語って、再びカレーにスプーンを
沈めた。それ以上は何も言うことはないという意思表示なのだ
ろう。北斗も冬馬に続く。カチヤカチヤと食器同士がぶつかる
音が響いた。

翔太も一口だけカレーを掬った。口に含めば香辛料の香りが
広がる。母が作るカレーは、どちらかというと甘口だ。一番目
の姉が子どもの頃からそうだったらしい。具材も食べやすいよ
うに小さく切られていて、コーンなんかが入るときもある。何
年も家族のために作って、あのかたちになつたのだろう。これ
から先も御手洗家の食卓にはあのカレーが並ぶはずだ。
彼女にしか作れない、とつておきのカレー。

「……僕、家に帰る。母さんに謝んなきや」

「おう」

「そつか。じゃあ明日は送つて行くよ」

こうして翔太の家出騒動はあっさりと幕を閉じた。

我ながら呆氣ないなと思うが、そもそも母は初めから怒つて
などいなかつた。翔太が自室で荷物をリュックに詰め込んでい
るとき、彼女は「冬馬くんと北斗くんに迷惑かけるんじやない
のよ」と、例の紙袋を置いて行ったのだ。出て行く先なんて告

げていなかつたが、母にはばれていたらしい。敵わないなあ。
そう思いながら苦笑する。

敵わないといえば、冬馬と北斗にだつて敵わない。二人の言
葉はいつだつて心地良く、身体の奥にまで染み込んでくる。そ
れに、本人にそんなつもりはないのだろうが、冬馬に親のこと
を言われてしまつては反抗する氣にもなれなかつた。だつて冬
馬はもう母親と口喧嘩することはできないのだから。

「冬馬、このサングリア結構いけるよ。カレーにも合うし……
うん、おいしい」

「そ、そうか？ よかった。次はほんもののサングリア飲ませ
てやつから、覚悟しとけよ」

「うん。でもどうせなら翔太が二十歳になつてからにしてほし
いな。……冬馬と翔太とこうやつて、小さなテーブルを囲んで
酒を飲むのが俺の夢なんだから」

「小さいは余計だつづーの。でも、そういうのも悪くねえな。
つまみの作り方でも調べとくか」

「はは、まだ先の話だつてば」

赤ワインと同じような色に北斗の頬が染まつていく。翔太は
アルコールなど摂取したことはないが、なんとなく、北斗は弱
いのだろうなと思っていた。酒を飲んだ北斗は表情も言葉もふ
にやふにやとしている。そんな姿を自分たちに見させてくれてい

ることに、どうしようもない嬉しさを感じてしまう。格好つけたがりの北斗も好きだけれど、ふにやふにやな北斗だって好きだ。冬馬も似たようなことを考えているのだろうか。北斗を見つめる視線が「仕方のねえやつ」と語っていた。

「俺たち、仲良しだって言われるけど……やっぱりきっかけはあれなのかな。冬馬の手作り弁当事件」

カラカラとグラスを左右に振って音を鳴らしながら北斗が口にした。身に覚えがある昔話に翔太も便乗することにする。

「冬馬君が口ケ弁出ない日にお弁当を持ってきたんだよねー。懐かしいなあ。僕らの仲がぐっと深まつた感動的エピソード」「……は？ なんことあつたか？」

「あつたよ！ 僕と北斗君がお昼どうしようかって話してた横で冬馬君つてば自分だけお弁当広げて『俺持ってきてるから』って言つたんだよ！ 『協調性なさすぎるでしょ！』って叫んだよ僕！」

まるで記憶にないと言わんばかりの冬馬の耳元で叫ぶと「うるっせえ！」と怒鳴り返されてしまった。そんな二人のやり取りに北斗は声を上げて笑う。

あのとき、冬馬が控え室の机の上に広げた弁当に興味を示したのは翔太のほうだった。どんな中身だったかは忘れてしまつたが、覗き込んだ弁当箱に詰め込まれたおかげが色鮮やかだつ

たことは覚えている。「作ってもらったの？」という翔太の言葉に冬馬は首を振つて「自分で作った」と言つたのだ。

あの頃抱いていた冬馬のイメージからはずいぶんとかけ離れた言葉だったと、今でも思う。こんなにおいしそうな弁当を冬馬が作ったのかと、弁当と冬馬を何度も見比べて、それから翔太は「うつそだあ！」と笑い飛ばした。

「——あ、冬馬君。カレーのおかわりちょうどいい」「おまえなあ。まだ話の途中だろうが」「だつて食べながら話したいんだもん。ねつ？」

冬馬はしぶしぶと席を立つと、翔太が差し出した空の皿を持ってキッキンへと姿を消した。目の前に座つている北斗と目を合わせて「忘れてたって」と寂しそうに微笑み合う。

……結局、これは北斗と翔太が冬馬のプライベートを知つたという思い出話に過ぎないのだ。仕事の合間に軽い雑談こそしてたものの、当時の三人はお互いのことに無関心だった。冬馬は北斗と翔太が仕事をきちんとしてくれれば良いと思つていただろうし、北斗は今よりも女性と一緒に居ることのほうが多いかった。翔太は、翔太はどうだろう。あの頃から面倒くさいことは面倒くさいと口に出していたし、冬馬のことをからかつて遊んでいたし、北斗の行動には良く呆れていた。自分が楽しければなんでも良くて、ジュピターをそういう場所にしたく

て。意図的にそういう振る舞いをしていました。姉に放り込まれた芸能界。自分が一番大事だった。

「おらよ。んで、続ぎは？」

部屋に戻つて来た冬馬から皿を受け取ると、翔太はふうふうと冷ましながらルゥと白飯を軽く混ぜて、スプーンに乗せた。

その一口を食べ終えるまで冬馬には待つていてもらう。

「んーとね、冬馬君のお弁当をつまみ食いしたの」

「はあ？」

「だからー、あんまりおいしそうだったから北斗君と一緒に冬馬君のお弁当をつまんだんだよ。そしたらほんとにおいしくて

さ、今度口ケ弁ない日は僕たちの分のお弁当も作つてよねつて指切りげんまんしたんだー！」

「カツアゲじゃねえか！」

「でも冬馬、『それくらいどうつてことないぜ！ 俺に任せろ！』ってはりきつてたよ」

「北斗君、冬馬君のものまね似てなーい」

くすくすと笑う北斗と翔太を交互に見つめて冬馬は頭を抱えた。冬馬にとつて、言われてみればそんなこともあつたような

気がするという程度の記憶だ。二人は楽しそうにしているが、もしかしたらあまり良い思い出ではないのかもしれない。けれど

これが仲良くなつたきつかけだと北斗が言うのだから、ほん

とうのことなのだろう。そして冬馬は翔太が言つた通り、二人へ弁当を作つたのだ。そうでなければ今の自分たちがあるわけがない。……それにしたつて、だ。

「おまえら俺の料理好きすぎだろ……」

すっかり湯気が消え、少しばかり冷めたカレーを掬いながら冬馬はそんな言葉をこぼした。ワインを注いでいた北斗と、手付かずのサラダを食べようとしていた翔太は冬馬の台詞にびたりと手を止める。

「もしかして自覚なかつた？」

「胃袋なんて、僕たちとつくる昔に掴まれてたよ」

だからこれからもおいしい料理、いっぱい作つてよね。

唇の端に米粒をつけたままの翔太に微笑まれて、冬馬は照れくさそうに「ばあか」と返したのだった。

手に持つた鍵を鳴らして北斗がドアノブに手をかける。

「俺は先に車取つてくるから、翔太は下で待つてて」

「はーい」

「じゃあね冬馬。誘つてくれてありがとう」

「おう。また来いよ」

昼食代わりにコーンスープと食べ損ねていたタルトを食べ

て、冬馬が好きなロボットアニメの映画を三人で見た。冬馬と北斗は普段からそこまで食べない。昨晚たらふくカレーを食べたのに「お腹すいた」と食べ物を要求する翔太にだけチャーハンを作ったのだが、それでも足りなかつたらしい。映画を見ているときもスナック菓子に伸びる手が止まることはなかつた。

玄関に座り込んでシューズを履く翔太を冬馬は後ろから見下ろした。水のような男。常に穏やかで、時に激的で、まさに型破り。掴めないのなら、何度も掴みに行くまでだ。

「また明日ね、冬馬君」

立ち上がりがつた翔太の腕を冬馬は掴んだ。

「わっ……何？」

ぱちくりとまばたきを繰り返す大きな目を見つめながら、冬馬はきゅっと喉を鳴らした。

好きになつてほしいと言われた日から、冬馬はずつと考えていた。自分にとつて翔太はなんなのだろう。北斗との違いはなんなのだろう。好きとは、恋とは、なんなのだろう。キスができたら好きなのか。好きだからキスができていたのか。恋愛なんてしたことがない頭で冬馬は必死に考えた。考えたとはいいうものの、結局のところ自問自答を繰り返しただけなのだ。

「翔太」

距離を詰めて、そのまま。自分の唇を押しつけた。

「……俺は、好きとかよくわからねえ。でも、おまえのことを好きになれると思った。つーかもう、好きになつてるような気がしないでもない。——これが俺の答えだ」

唇を離したあと、冬馬は恥ずかしさに目を逸らした。翔太とはもう何度もキスをした。けれど冬馬から翔太に唇を寄せたことは一度だつてない。どんどん顔に熱が溜まっていくのがわかる。比例するよう心臓の高鳴りも速くなつて、頭がくらくらとした。腕を掴んでいた手がゆっくりと落ちていく。指先が震えて、力が入らなかつた。

「……っ」

そんな冬馬にあてられて、翔太も頬を赤くした。

キスをされた。あの冬馬から。翔太の『好き』と同じように、翔太のことを『好き』になれると言われた。それはつまり、翔太が冬馬を独占できるという意味だ。愛しても良いという意味だ。歓喜に身体がぞくりと震える。世界の崩壊がこんなにも幸福なことだつたなんて、翔太は知らなかつた。

背負つていたリュックをコンクリートの上に落として、冬馬に向かつて両腕を伸ばした。ぎゅっと抱きついた身体は熱くて、ドキドキとうるさかつた。

「冬馬君、心臓すごいね。熱でもあるみたい」

「ッ……ほつとけ」

左胸に耳を当てれば冬馬の鼓動が聴こえる。心臓は、壊れてしまうんじゃないかというくらい忙しなく動いていた。人は一生のうちに打つ心臓の回数が決まってるんじやなかつたっけ？あれって迷信だっけ？まあどっちでもいいか。そんなことを思いながら翔太はくつくつと笑う。

冬馬君、僕のせいで早死にしちやつたらどうしよう。

そう思ったところで悲しみではなく嬉しさのほうが勝るのだから、翔太も大概だった。おかげさまで、空腹だった腹の中が満たされていく心地がする。

顔を上げて真っ赤になつている冬馬の頬に口付けると、翔太はリュックを持ち『ごちそうさま』と、それだけを告げてドアノブを勢い良く押した。待て、と冬馬が腕を伸ばしてみたところで軽やかな身体は捕まらない。閉まる前の扉にしがみついて、部屋の前に続く廊下を睨みつけたが、翔太はもうどこにも居なかつた。

「翔太のやつ……何が『ごちそうさま』だ……！」

恨み言は誰の耳に届くこともなく消えていった。

触れられた頬を手のひらで抑える。唇ではなく頬に触れられたことに少しだけ物足りなさを感じながら、冬馬は部屋の扉を閉めた。

良く晴れた、そよ風に若葉が揺れる日曜日のことだった。

——夢を見た。もう顔もおぼろげな母の夢だった。母は父の一番好きな人で、冬馬の一番好きな人でもあった。そう、本人に告げた記憶もある。母は喜んでくれたが、冬馬のことを同じように好きだとは言つてくれなかつた。当たり前のことだろう。母の一番は父であるべきだ。

電車に揺られながら、冬馬は神奈川の実家に向かっていた。東京で一人暮らしをするようになつてからは掃除をするためだけに帰つている。月に一度は帰ると決めていたが、先月はすっかり忘れてしまつていた。母の夢を見て、そのことを思い出したのだ。

夢の中で彼女は笑つていた。キッチンに立つて料理をしていろ間、足にしがみみつく子どもの口元へスプーンを運び「おいしい？」と微笑みかけるような人だった。夢と現実は違うと言つたかった。

——冬馬。

その人は、鈴が鳴るような声をしていたと思う。声だけは、どんなに考えても思い出せなかつた。今、冬馬のことをそう呼ぶ人間を思い浮かべると、甘くとろけた声を持つ男が出てくる

のだからたまたまではない。

駅を出て數十分。慣れた道をひたすら歩けば黄土色のマンションが見えてくる。『天ヶ瀬』と父の字で書かれたポストの中には広告がびっしりと入っていた。名前が記載されていないチラシだけを引き抜いて備えつけのゴミ箱に投げ入れる。

「ただいま。母さん」

外はすっかり夕方だった。夕陽がリビングに差し込んでいて思わずため息が出そうになつたが、きらきらと宙を舞う埃に気分が沈んでいく。冬馬は手にしていた封筒の束をテーブルの上に置くと、さつそく上着を脱いで掃除に取りかかることにした。

電気も水道も止めていない。部屋の窓をすべて開けて掃除機をかけたあと、雑巾で床と棚の埃を拭く。掃除と言つてもやることはそれくらいのものだ。一時間もあれば終わってしまう。掃除を終えると、冬馬は腰を落ち着ける間もなく上着を羽織つた。リビングに置いているキャビネットの上、調度品に紛れて立てかけられた母の写真が目に入る。冬馬の一番好きな人。その一番があと一人も居るだなんて話をしたら、裏切り者と失望されてしまうだろうか。

……いや。冬馬は目を閉じると首を左右に振った。断罪されたがっているこの気持ちは母への後ろめたさと、自己満足から

くるものだとわかつていた。

それでも冬馬は手を取ることにしたのだ。恋をする相手に、二人の手ではなく一人の手を。好きになつてほしいと懇願した少年の手を。翔太を。自分の意志で選んだのだ。

——未知を。恋を知りたかった。

それはきっとショートケーキの上に乗つたイチゴのように、クリーミソーダの中に浮かべたチェリーのように、甘くて酸っぱい真つ赤なハート。

あの瞬間、冬馬のそれは翔太によつて掬われてしまつた。

THANK YOU!

ここまでお付き合いくださりありがとうございます。こんにちは、はるのあらしです。

恋を知らない冬馬（でもキスはやぶさかではない）と冬馬のことを独占したい翔太のお話をしました。気持ちが通じ合う瞬間って何通りもあると思うんですが、そのうちのひとつだと思ってお楽しみいただけたら幸いです。

冬馬の恋と翔太の愛。この微妙な意識の差に二人は今後悩むこともあるかも知れませんが、そこは冬馬のハートに火をつけてしまった翔太が責任を取るのでしょう。

ところで捏造のオンパレードみたいなこの本ですが、個人的に過去やんちゃしてた冬馬・Jupiter が大好きな北斗・いろんなものを食べる翔太が書いてとても楽しかったです。

永遠に眺めていたい冬馬の赤面。どうにか崩したい翔太の余裕。

本当にここまでお付き合いくださりありがとうございました！

幸福を掬え！

2018.05.03 / SUPER MIRACLE FESTIV@L!! 2018

はるのあらし

Twitter @haruno1255 Pixiv 11999999

Mail haruno.a.1255@gmail.com

Printed by BRO'S